

第五十一回 貴族院議事速記録第十四號

大正十五年二月二十四日(水曜日)

午前十時二十分開議

議事日程 第十四號 大正十五年二月二十四日

午前十時開議

第一 請願委員長報告

第二 民事訴訟費用法中改正法律案(政府提出)

第三 民事訴訟用印紙法中改正法律案(政府提出)

第四 商事非訟事件印紙法中改正法律案(政府提出)

第五 非訟事件手續法中改正法律案(政府提出)

第六 人事訴訟手續法中改正法律案(政府提出)

第七 競賣法中改正法律案(政府提出)

第八 民法中改正法律案(政府提出)

第九 破產法中改正法律案(政府提出)

第十 明治三十二年法律第五十號中改正法律案(政府提出)

第十一 刑事訴訟法中改正法律案(政府提出)

第十二 所得稅法中改正法律案(政府提出)

第十三 大正九年法律第十二號中改正法律案(政府提出)

第十四 地租條例中改正法律案(政府提出)

第十五 明治三十七年法律第十二號中改正法律案

(政府提出)  
(衆議院送付)

第一讀會

第十六 營業稅法廢止法律案(政府提出)

第十七 營業收益稅法案(政府提出)

第十八 資本利子稅法案(政府提出)

第十九 相續稅法中改正法律案(政府提出)

第二十 通行稅法廢止法律案(政府提出)

第二十一 酒造稅法中改正法律案(政府提出)

第二十二 酒精及酒精含有飲料稅法中改正法律案

(政府提出)  
(衆議院送付)

第二十三 麥酒稅法中改正法律案(政府提出)

第二十四 醬油稅則廢止法律案(政府提出)

第二十五 家用醬油稅法廢止法律案(政府提出)

第二十六 織物消費稅法中改正法律案(政府提出)

第二十七 賣藥稅法廢止法律案(政府提出)

第二十八 骨牌稅法中改正法律案(政府提出)

第二十九 清涼飲料稅法案(政府提出)

第三十 大正九年法律第五十一號中改正法律案(政府提出)

第三十一 地方稅ニ關スル法律案(政府提出)

第三十二 明治四十一年法律第三十七號中改正法律案

(政府提出)  
(衆議院送付)

第三十三 大正十二年勅令第四百五號廢止法律案(政府提出)

提出)

第三十四 市町村義務教育費國庫負擔法中改正法律案

(衆議院提出)

第三十五 小出柳津間鐵道敷設ノ請願

第一讀會

第一讀會(續)  
(委員長報告)

第一讀會

第一讀會

第一讀會

會 議

第三十六 帝國在郷軍人會國庫補助ノ請願 會 議

第三十七 木次落合間鐵道速成ノ請願 會 議

第三十八 木次三次間鐵道敷設ノ請願 會 議

第三十九 花卷驛ヨリ遠野町ヲ經テ釜石港ニ至ル鐵道敷

設ノ請願 會 議

第四十 初山別村ニ漁港修築ノ請願 會 議

○議長(公爵徳川家達君) 是ヨリ諸般ノ報告ヲ致サセマス

〔小林書記官朗讀〕

去ル二十日可決シタル議員勳四等高橋直治君ニ對スル弔辭ハ即日之ヲ贈レ

同日簡易生命保險法中改正法律案特別委員會ニ於テ當選シタル正副委員長

ノ氏名左ノ如シ

委員長 小松 謙次郎君 副委員長 安樂 兼道君

同日豫算委員長ヨリ第一分科擔當委員伯爵柳澤保惠君ヲ第三分科兼務委員

ニ選定シタル旨ノ報告書ヲ提出セリ

同日特別委員長ヨリ左ノ報告書ヲ提出セリ

大正十二年勅令第四百五號廢止法律案可決報告書

去ル二十一日衆議院ヨリ左ノ政府提出案ヲ受領セリ

所得稅法中改正法律案

大正九年法律第十二號中改正法律案

地租條例中改正法律案

明治三十七年法律第十二號中改正法律案

營業稅法廢止法律案

營業收益稅法案

資本利子稅法案

相續稅法中改正法律案

通行稅法廢止法律案

酒造稅法中改正法律案

酒精及酒精含有飲料稅法中改正法律案

麥酒稅法中改正法律案

醬油稅則廢止法律案

自家用醬油稅法廢止法律案

織物消費稅法中改正法律案

賣藥稅法廢止法律案

骨牌稅法中改正法律案

清涼飲料稅法案

大正九年法律第五十一號中改正法律案

地方稅ニ關スル法律案

明治四十一年法律第三十七號中改正法律案

同日衆議院ヨリ左ノ議案ヲ提出セリ

市町村義務教育費國庫負擔法中改正法律案

一昨二十二日大正十四年勅令第二百四十五號(承諾ヲ求ムル件)特別委員會

ニ於テ當選シタル正副委員長ノ氏名左ノ如シ

委員長 伯爵 川村 鐵太郎君 副委員長 三宅 秀君

昨二十三日日本勸業銀行法中改正法律案外二件特別委員會ニ於テ當選シタ

ル正副委員長ノ氏名左ノ如シ

委員長 子爵 大河内 輝 耕君 副委員長 淺田 德則君

同日特別委員長ヨリ左ノ報告書ヲ提出セリ

簡易生命保險法中改正法律案可決報告書

同日衆議院ヨリ同院ニ於テ左ノ政府提出案ヲ否決シタル旨ノ通牒ヲ受領セ

リ 鐵道敷設法中改正法律案

本日第五部ニ於テ懲罰委員侯爵細川護立君ノ補闕選舉ヲ行ヒシニ其ノ結果侯爵大隈信常君當選セリ

本日政府ヨリ左ノ決算及同検査報告ヲ提出セリ

大正十三年度歳入歳出總決算

大正十三年度各特別會計歳入歳出決算

大正十三年度歳入歳出決算検査報告

○議長(公爵徳川家達君) 是ヨリ本日ノ會議ヲ開キマス、請暇ノ件ニ付キ御諮リヲ致シマス、男爵山内長人君病氣ニ付キ十日間、加太邦憲君病氣ニ付キ會期中請暇ノ申出ガゴザイマシタ、許可スルコトニ御異存ゴザイマセヌカ

〔異議ナシ〕ト呼フ者アリ

○議長(公爵徳川家達君) 御異議ナイト認メマス

○議長(公爵徳川家達君) 是ヨリ本日ノ議事日程ニ移リマス、請願委員長報告、請願委員長一條公爵ノ登壇ヲ望ミマス

〔公爵一條實孝君演壇ニ登ル〕

○公爵一條實孝君 第一回請願委員長報告ヲ申上ゲマス、請願委員會ハ去ル一月二十一日、正副委員長ノ選舉ヲ行ヒマシテ、續イテ分科ノ決定、分科擔當委員ノ選定、委員會並ニ分科會ノ定日等ヲ定メマシタ、即チ第一分科、大藏省、農林省、商工省、第二分科、外務省、内務省、文部省、第三分科、内閣、司法省、逓信省、第四分科、陸軍省、海軍省、鐵道省ト定メマシタ、委員會ノ定日ヲ毎週金曜日ト定メマシタ、分科會ノ定日ヲ、第一分科、第三分科會ニアツテハ、毎週月曜日、第二、第四分科會ニアリテハ毎週火曜日ト定メマシタ、各分科正副主査ノ選舉ハ第一、第三分科ニアツテハ一月二十五日ニ、第二、第四分科ニアツテハ一月二十六日ニ行ヒマシタ、爾來、委員會ハ今日マデ三回開會イタシマシタ、又分科會ハ、第一分科ニアツテハ二回、第二、第三、第四分科會ハ何レモ三回ツツ開會イタシマシタ、請願文書表報告ハ一月二十七日ニ第一回ヲ、二月三日ニ第二回ヲ、二月十日ニ第三回ヲ、二月十七日ニ第四回ヲ提出イタシマシタ、又請願委員會特別報告ハ二月十九日ニ一回

提出イタシマシタ、二月二十三日午後四時ノ締切ニ於キマシテ、請願受領件數二百三十四件、五百七通、連署人名五万六千三百三名ニ達シテ居リマス、此中、請願文書表掲載件數ハ百四十五件三百四十九通デアリマス、審査ノ結果、院議ニ付スベシト議決シタルモノ八件、八通、院議ニ付スルヲ要セズト議決シタルモノ一件、一通、審査未了ニ屬スルモノ百三十六件、三百四十通デアリマス、尙ホ請願文書表未掲載件數ハ八十九件、百五十八通アリマス

○議長(公爵徳川家達君) 諸君ニ於テ御異議ガ無ケレバ日程第二ヨリ第十一マデ一括シテ議題ト致シマス

〔異議ナシ〕ト呼フ者アリ

○議長(公爵徳川家達君) 日程第二、民事訴訟費用法中改正法律案外九件、第一讀會、司法大臣

民事訴訟費用法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

民事訴訟費用法中左ノ通改正ス

第一條中「訴訟費用ハ」ヲ「訴訟費用ハ權利ノ伸張又ハ防禦ニ必要ナル限度ノ費用トシ」ニ改ム

第八條中「第二百二十七條」ヲ「第二百三十五條」ニ、「附添ヲ命シタルトキハ」ヲ「附添ヲ命シタルトキ又ハ同法第二百六十二條若クハ第三百十條第一項ノ規定ニ從ヒ囑託ヲ爲シタルトキハ」ニ改ム

第十一條乃至第十三條中「及ヒ通事」ヲ、「通事及ヒ民事訴訟法第三百十條第二項ニ規定スル說明者」ニ改ム

第十七條 證人、鑑定人、通事及ヒ民事訴訟法第三百十條第二項ニ規定スル說明者ノ日當、旅費、止宿料其他ノ費用ハ請求ニ因リ裁判所之ヲ支拂

フ民事訴訟法第二百六十二條及ヒ第三百十條第一項ノ規定ニ依ル囑託ヲ受ケタル者ニ對スル報酬亦同シ

第十八條 當事者ノ豫納ニ係ラサル費用ハ裁判ニ因リテ其費用ヲ負擔スヘキ者ヨリ裁判所之ヲ取立ツルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル費用ノ取立ハ第一審ノ受訴裁判所ノ決定ニ依リ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒ之ヲ執行ス其決定ハ執行力アル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス

前項ノ規定ハ民事訴訟法第二百二十三條ノ規定ニ從ヒ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ相手方ヨリ裁判費用ノ取立ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 民事訴訟法第二百一一條及ヒ第二百二條ノ規定ニ依ル費用ノ取立ノ決定ハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒ之ヲ執行ス其決定ハ執行力アル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

民事訴訟用印紙法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

民事訴訟用印紙法中左ノ通改正ス

第二條中「第三條乃至第六條」ヲ「第二十二條第一項及ヒ第二十三條」ニ改ム

第五條ノ二 民事訴訟法第七十一條又ハ第七十五條ノ規定ニ依ル參加ノ申出書ニハ第二條、第三條及ヒ前條ノ規定ニ準シ印紙ヲ貼用ス可シ

第六條中「支拂命令ノ申請」ヲ「支拂命令ノ申立」ニ改ム  
第六條ノ二中「左ニ掲クル申立」ヲ「左ニ掲クル申立、申出」ニ改メ同條第一號乃至第十三號ヲ左ノ如ク改ム

一 期日指定ノ申立

二 中斷又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼ノ申立

三 民事訴訟法第六十四條ノ參加ノ申出

四 除斥又ハ忌避ノ申立

五 和解ノ申立

六 費用額確定ノ申立

七 強制執行ノ停止若クハ續行又ハ執行處分ノ取消ノ申立

八 配當要求

九 強制競賣又ハ強制管理ノ申立

十 債權又ハ他ノ財產權差押ノ申請

十一 民事訴訟法第七百三十二條乃至第七百三十四條ノ申立

第六條ノ三中「左ニ掲クル申立」ヲ「左ニ掲クル申立、申出」ニ「證據調ノ申立」ヲ「證據ノ申出」ニ改ム

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百五十六條第三項又ハ第四百四十二條ノ規定ニ依リ訴訟カ繫屬スルトキハ第二條及ヒ第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但第六條又ハ第十條ノ規定ニ依リ貼用シタル印紙ノ額ヲ通算ス

第九條 削除

第十條中「申立」ヲ「申立、申出」ニ改ム

第十一條中「第九十七條」ヲ「第二百二十條」ニ改ム

第十二條乃至第十五條 削除

第十六條中「及ヒ第十二條」ヲ削除

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

商事非訟事件印紙法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

商事非訟事件印紙法中左ノ通改正ス

第一條中「民事訴訟用」ヲ削ル

第二條第三號ヲ削ル

第六條中「協諾契約」ヲ「強制和議」ニ改ム

第八條中「第二章第五節」ヲ「第三章第一節」ニ改ム

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

非訟事件手續法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

非訟事件手續法中左ノ通改正ス

第四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

管轄裁判所ノ指定ハ關係アル裁判所ニ共通スル直近上級裁判所申立ニ因リ決定ヲ以テ之ヲ爲ス此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七條中「第六十四條」ヲ「第八十條」ニ改メ同條但書ヲ左ノ如ク改ム

但私文書ニ認證ヲ受クヘキ旨ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 民事訴訟法第五百十條ノ規定ハ申立及ヒ陳述ニ之ヲ準用ス

第二十二條 當事者カ其責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ即時抗告ノ期間ヲ

遵守スルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ノ止ミタル後一週間内ニ限り

懈怠シタル行爲ノ追完ヲ爲スコトヲ得

第二十四條 削除

第二十五條中「前五條ニ」ヲ「特ニ」ニ改ム

第二十九條中「第八十條第一項」ヲ「第九十三條」ニ改ム

第三十條第一項ニ左ノ但書ヲ加ヘ同條第二項ヲ削ル

但獨立シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十八條中「七十二條第一項」ヲ「第八十九條」ニ改ム

第二百二十六條中「第九十八條及ヒ商法施行法第九十五條第二項、第二百

條第二項、第一百十條第二項」ヲ「及ヒ第九十八條」ニ改ム

第三百二十四條中「第四十八條及ヒ商法施行法第一百二條第二項」ヲ「及ヒ第四

十八條」ニ改ム

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

人事訴訟手續法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

人事訴訟手續法中左ノ通改正ス

第十條中「第百一十一條第二項、第三項及ヒ第三百三十五條乃至第三百四十一條」ヲ「第百三十九條、第百四十條第一項、第二百五十五條、第三百十六條及ヒ第三百十七條」ニ、「第二百二十九條」ヲ「第二百三條」ニ改メ第三項ヲ削ル

第十一條第二項ヲ削リ同條第三項中「前二項」ヲ「前項」ニ改ム

第四十六條中「第六節及ヒ第七節」ヲ「第三節第二款及ヒ第三款」ニ改ム

第七十九條中「第五十條」ヲ「第六十二條及ヒ第六十三條」ニ改ム

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

競賣法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣

若槻禮次郎

司法大臣

江木 翼

競賣法中左ノ通改正ス

第二十五條第三項ヲ削ル

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

民法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

民法中左ノ通改正ス

第五十條 支拂命令ハ債權者カ法定ノ期間内ニ假執行ノ申立ヲ爲ササル

ニ因リ其效力ヲ失フトキハ時効中斷ノ效力ヲ生セス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

破産法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣

若槻禮次郎

司法大臣

江木 翼

破産法中左ノ通改正ス

第二百八十八條第一項ヲ左ノ如ク改メ同條第四項ヲ削ル

破産者カ其ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ債權調査ノ期日ニ出頭スル

コト能ハサリシトキハ其ノ事由ノ止ミタル日ヨリ一週間内ニ限り異議ヲ

追完スル爲破産裁判所ニ原狀回復ノ申立ヲ爲スコトヲ得

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治三十二年法律第五十號中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

明治三十二年法律第五十號中左ノ通改正ス

第二條 削除

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

參照

外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル法律明治三十二年三月法律第五十號

第一條 法令ノ規定ニ依リ署名、捺印スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名スルヲ以テ足ル

捺印ノミヲ爲スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名ヲ以テ捺印ニ代フルコトヲ得

第二條 民事訴訟法第九十二條ニ依リ訴訟上ノ救助ヲ求ムル外國人ハ日本ニ住所、居所ヲ有セサルトキハ其ノ住所又ハ居所アル外國ノ管轄官廳ノ證明書ヲ以テ同法第九十三條ニ定メタル無資力ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ其ノ證明書ニハ日本ニ駐在スル其ノ外國ノ領事ノ認證ヲ受クヘシ日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ハ其ノ住所又ハ居所地ノ市町村長ノ證明書ヲ以テ前項ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ市町村長ノ證明書ヲ提出スルコト能ハサルトキ又ハ其ノ證明力不十分ナルトキハ裁判所ハ日本ニ駐在スル本國領事ノ認證アル本國管轄官廳ノ證明書ヲ提出セシムルコトヲ得

刑事訴訟法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

大正十五年二月十九日

内閣總理大臣 若槻禮次郎  
司法大臣 江木 翼

刑事訴訟法中左ノ通改正ス

第五百七十條但書ヲ削ル

第五百七十二條中「保證」ヲ「擔保」ニ、「請求ノ拋棄ニ基キテ爲ス判決」ヲ「請求ノ拋棄」ニ改ム

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

〔國務大臣江木翼君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(江木翼君) 議題トナツテ居リマスル民事訴訟費用法中改正法律案外九件ハ、主ト致シマシテ民事訴訟法改正ニ伴フ諸案デゴザイマシテ、民事訴訟費用法中ノ費用算定ノ原則ヲ明カニスル規定ヲ加ヘ、又訴訟上ノ救助ヲ爲シタル場合ニ於ケル費用ノ取立ニ關スル規定ヲ設ケマシタノガ改正ノ主モナル點デアリマスル、其他澤山ノ規定ハゴザリマスルガ、總テ民事訴訟法ノ改正ニ伴フ整理ノ意味ニ過ギナイ所ノモノデゴザリマス、何卒、御審議ノ上、速ニ御協賛アラムコトヲ希望イタシマス

○議長(公爵徳川家達君) 唯今、司法大臣ノ説明セラレマシタ日程第二ヨリ第十一マデノ法律案ハ民事訴訟法中改正法律案外一件ノ特別委員ニ付託イタシマス

○議長(公爵徳川家達君) 次ハ、是亦諸君ニ於テ御異議ガ無ケレバ、日程第十二ヨリ第三十二マデノ法律案ヲ一括シテ議題ト致シマス

所得稅法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

貴族院議長公 德川家達殿

衆議院議長 粕谷 義三

所得稅法中左ノ通改正ス

第一條ノ二ヲ削ル

第三條 所得稅ハ左ノ所得ニ付之ヲ賦課ス

第一種

甲 法人ノ普通所得

乙 法人ノ超過所得

丙 法人ノ清算所得

第二種

甲 本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル公債、社債若ハ銀行預金ノ利子又ハ貸付信託ノ利益

乙 第一條ノ規定ニ該當セサル者ノ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當、剩餘金ノ分配又ハ利益若ハ剩餘金ノ處分タル賞與若ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與

第三種

第二種ニ屬セサル個人ノ所得

第三條ノ三 本法ニ於テ貸付信託ト稱スルハ信託會社ノ引受ケタル金銭信託ニシテ信託財産ノ運用方法ヲ預入又ハ貸付ノミニ限定シタルモノヲ謂フ

第四條中「法人ノ所得」ヲ「法人ノ普通所得」ニ改ム

第五條中「法人ノ各事業年度ノ所得」ヲ「法人ノ普通所得」ニ、「同年度」ヲ「當該事業年度」ニ改ム

第八條中「所得」ヲ「普通所得」ニ改ム

第九條 削除

第十條 削除

第十一條中「拂込株式金額、出資金額、積立金及最後ノ事業年度ニ於ケル留保所得ノ合計金額」ヲ「拂込株式金額又ハ出資金額」ニ改ム

第十四條 第三種ノ所得ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ算出ス

一 營業ニ非サル貸金ノ利子並第二種ノ所得ニ屬セサル公債、社債及預金ノ利子ハ前年中ノ收入金額

二 山林ノ所得ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額

三 賞與又ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ收入金額

日迄ノ收入金額

四 法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當又ハ剩餘金ノ分配ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ收入金額（無記名株式ノ配當ニ付テハ支拂ヲ受ケタル金額）ヨリ其ノ十分ノ四ヲ控除シタル金額

五 俸給、給料、歳費、年金、恩給、退隱料及此等ノ性質ヲ有スル給與ハ前年中ノ收入金額但シ前年一月一日ヨリ引續キ支給ヲ受ケタルニ非サルモノニ付テハ其ノ年ノ豫算年額

六 前各號以外ノ所得ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額但シ前年一月一日ヨリ引續キ有シタルニ非サル資産、營業又ハ職業ノ所得ニ付テハ其ノ年ノ豫算年額

株式ノ消却ニ因リ支拂ヲ受クル金額又ハ退社ニ因リ持分ノ拂戻トシテ受クル金額カ其ノ株式ノ拂込金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ法人ヨリ受クル利益ノ配當ト看做ス

第一項第一號、第二號及第四號ノ所得ニ付テハ被相續人ノ所得ハ之ヲ相續人ノ所得ト看做シ第六號ノ所得ニ付テハ相續シタル資産又ハ營業ハ相續人カ引續キ之ヲ有シタルモノト看做シテ其ノ所得ヲ計算ス

第十五條 前條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額一萬二千圓以下ナルトキハ其ノ所得中勤勞所得（前條第一項第三號及第五號ノ所得）ニ付左ノ金額ヲ控除ス

一 所得總額六千圓以下ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ二

二、所得總額中勤勞所得以外ノ所得六千圓以上ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ一

三、所得總額六千圓ヲ超エ勤勞所得以外ノ所得六千圓未滿ナルトキハ勤勞所得中勤勞所得以外ノ所得ト合算シテ六千圓ニ達スル迄ノ金額ノ十分ノ二、其ノ他ノ金額ノ十分ノ一

戶主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戶主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同シ

第十六條 第一項ヲ左ノ如ク改ム

前二條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額三千圓以下ナルトキハ其ノ所得ヲ有スル者ノ申請ニ依リ其ノ所得ヨリ其ノ年三月一日現在ノ同居ノ戶主及家族中年齡十八歲未滿若ハ六十歲以上ノ者又ハ不具癡疾者一人ニ付百圓ヲ控除ス但シ第二條ノ規定ニ依ル納稅義務者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十六條第三項ヲ左ノ如ク改ム

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ納稅義務者ノ一人又ハ數人ノ所得ヨリ之ヲ控除ス

第十七條中「郡」ヲ削ル

第十八條第七號ヲ削ル

第二十條中「八百圓」ヲ「千二百圓」ニ、「第十五條及第十六條」ヲ「第十五條、第十六條及第十六條ノ三」ニ改ム

第二十一條 第一種ノ所得ニ對スル所得稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス

甲 普通所得

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人 百分ノ五

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セサル法人 百分ノ十

乙 超過所得

超過所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用ス

普通所得金額中資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ四

同百分ノ二十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ十

同百分ノ三十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ二十

清算所得 百分ノ二十

積立金又ハ本法其ノ他ノ法律ニ依リ所得稅ヲ課セラレタル所得ヨリ成ル金額 百分ノ五

其ノ他ノ金額 百分ノ十

法人カ各事業年度ニ於テ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ第一種ノ所得ニ對スル所得稅額ヨリ之ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ第一種ノ所得計算上之ヲ損金ニ算入セス

前二項ノ規定ハ法人ノ清算所得ニ對スル所得稅ニ付之ヲ準用ス

第二十一條ノ二 同族會社カ各事業年度ニ於テ留保シタル金額中左ノ各號ノ一ニ該當スル金額アルトキハ政府ハ其ノ事業年度ノ普通所得ヲ年額ニ換算シタル金額中五萬圓以下ノ金額ニ百分ノ十、五萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ十五、十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十、五十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十五、百萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ三十ヲ乘シタル合計金額ノ普通所得年額ニ對スル割合ヲ求メ之ヲ稅率トシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル金額(各號共ニ該當スル場合ニハ其ノ多額ナル一方)ニ付適用シテ算出シタル稅額ヲ普通所得ニ對スル所得稅ニ加算スルコトヲ得

一 事業年度ノ普通所得中留保シタル金額カ其ノ事業年度ニ於ケル普通所得ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額

二 事業年度末ニ於ケル積立金及其ノ事業年度ノ普通所得中留保シタル

金額ノ合計カ其ノ事業年度末ニ於ケル拂込株式金額又ハ出資金額ノ

二分ノ一ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額但シ其ノ事

業年度末ニ於ケル積立金カ拂込株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一ヲ

超過スル場合ニ於テハ其ノ超過額ハ之ヲ控除ス

本法ニ於テ同族會社ト稱スルハ株主又ハ社員ノ一人及之ト親族、使用人

等特殊ノ關係アル者ノ株式金額又ハ出資金額ノ合計カ其ノ法人ノ株式金

額又ハ出資金額ノ二分ノ一以上ニ相當スル法人ヲ謂フ

第二十二條ニ左ノ二項ヲ加フ

信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財産ニ付納付シタル第二種ノ

所得ニ對スル所得稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該貸付信託ノ利益ニ對

スル所得稅額ヨリ之ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ其ノ貸付信

託ノ利益ニ之ヲ加算ス

第二十三條中

「八百圓以下ノ金額  
八百圓ヲ超ユル金額  
千圓ヲ超ユル金額

百分ノ〇、五  
百分ノ一  
百分ノ二

百分ノ〇、八ニ改メ第  
百分ノ二

「千二百圓以下ノ金額  
千二百圓ヲ超ユル金額

一項但書ヲ左ノ如ク改ム  
但シ山林ノ所得ハ山林以外ノ所得ト之ヲ區分シ其ノ所得ヲ五分シタル金

額ニ對シ此ノ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ五倍シタルモノヲ以テ其

ノ稅額トス

第二十五條中「四月中」ヲ「三月十五日迄」ニ、「第十六條」ヲ「第十六條又ハ

第十六條ノ三」ニ改ム

第三十一條中「前年第三種ノ所得稅ヲ納メ其ノ年第二十五條ノ申告ヲ爲シ

タル者」ヲ「第三種ノ所得又ハ個人ノ營業ニ付其ノ年法定ノ期限迄ニ所得

金額又ハ純益金額ノ申告ヲ爲シ且其ノ決定ヲ受ケタル者」ニ、「第七十六

條」ヲ「第七十六條又ハ營業收益稅法第二十八條乃至第三十條」ニ、「前項」ヲ

「前二項」ニ改メ第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

其ノ年分ノ所得金額及純益金額ノ決定前選舉ヲ行フ場合ニ於テハ前年第

三種ノ所得又ハ個人ノ營業ニ付所得稅又ハ營業收益稅ヲ納メタルコトヲ

以テ其ノ年所得金額又ハ純益金額ノ決定ヲ受ケタルモノト看做ス

第四十一條 調査委員及補闕員ノ任期ハ選舉期日ノ屬ル月ヨリ四年トス

選舉區域ノ變更ニ因リ其ノ區域内ニ於ケル第三種ノ所得ニ付其ノ年所得

金額ノ決定ヲ受ケタル者及個人ノ營業ニ付其ノ年純益金額ノ決定ヲ受ケ

タル者ノ合計數ニ五分ノ一以上ノ増減ヲ來シタル場合ニ於テハ調査委員

及補闕員ノ任期ハ選舉區域ノ變更アリタル月ヲ以テ終了スルモノトス但

シ其ノ選舉區域ノ變更ノ月カ一月又ハ二月ナルトキハ三月、四月乃至八

月ナルトキハ九月、十二月ナルトキハ翌年三月ヲ以テ終了スルモノトス

第三十一條第二項ノ規定ハ其ノ年分ノ所得金額及純益金額ノ決定前選舉

區域ノ變更アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十五條中「第三種ノ所得ニ付」ヲ「第三種ノ所得ニ對スル所得稅若ハ營

業收益稅ノ何レニ付テモ」ニ改ム

第五十一條中「八月三十日」ヲ「五月三十一日」ニ改ム

第五十九條第一項ヲ左ノ如ク改ム

第二十六條、第五十一條若ハ第五十二條ノ規定ニ依リ第一種若ハ第三種

ノ所得金額ヲ決定シタルトキ又ハ第二十一條ノ二ノ規定ニ依リ稅額ヲ加

算シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第六十條中「所得金額」ヲ「所得金額又ハ加算稅額」ニ改ム

第六十四條中「收入豫算年額四分ノ一」ヲ「第十四條第一項第五號及第六號

ノ所得額二分ノ一」ニ、「贈與ヲ爲シタル爲」ヲ「相續、贈與又ハ營業繼續ニ

因リ」ニ改ム  
第六十五條中「收入豫算年額ニ對シ四分ノ一」ヲ「二分ノ一」ニ改ム  
第六十七條中「九月一日ヨリ三十日限」ヲ「七月一日ヨリ三十一日限」ニ、

「十一月一日ヨリ三十日限」ヲ「十月一日ヨリ三十一日限」ニ改ム

第七十三條ノ二 同族會社ノ行爲又ハ計算ニシテ其ノ所得又ハ株主社員若ハ之ト親族、使用人等特殊ノ關係アル者ノ所得ニ付所得稅連脫ノ目的アリト認メラルルモノアル場合ニ於テハ其ノ行爲又ハ計算ニ拘ラス政府ハ其ノ認ムル所ニ依リ此等ノ者ノ所得金額ヲ計算スルコトヲ得

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
第三種ノ所得ニ付テハ大正十五年分所得稅ヨリ本法ヲ適用ス但シ第二十五條、第五十一條及第六十七條ノ改正規定ハ大正十六年分所得稅ヨリ之ヲ適用ス

第十四條第一項第三號又ハ第四號ノ所得ニシテ大正十四年三月中ノ收入ニ屬スルモノハ之ヲ大正十五年分第三種所得トシテ計算セス  
第十六條第一項ノ改正規定中三月一日トアルハ大正十五年ニ限り四月一日トス

本法施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ所得及本法施行前ニ於ケル解散又ハ合併ニ因ル清算所得ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル  
所得調査委員及所得審査委員ニ關シテハ大正十五年九月三十日迄ハ仍從前ノ例ニ依ル

從前ノ規定ニ依ル所得調査委員及補闕員ノ任期ハ大正十五年九月三十日ヲ以テ終了ス  
第三十一條、第四十一條及第四十五條ノ改正規定中營業收益稅ニ關スルモノハ大正十五年分ニ付テハ之ヲ營業稅ニ關スルモノトス

大正九年法律第十二號中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也  
大正十五年二月二十一日

貴族院議長公爵德川家達殿

衆議院議長 粕谷義三

大正九年法律第十二號中左ノ通改正ス

第二條中「所得稅法第三條第一種甲及戊」ヲ「所得稅法第三條第一種甲及乙」ニ改ム

第三條中「所得稅法第九條第三項及第十二條」ヲ「所得稅法第十二條」ニ改ム

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

參照

所得稅法ノ施行ニ關スル法律大正九年七月法律第十二號(抄)

第二條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ所得稅法第三條第一種甲及戊並第二種乙ノ所得ニ付テハ所得稅法ニヨル所得稅ヲ課セス

第三條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人カ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ所得稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人カ所得稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スルトキハ所得稅法第九條第三項及第十二條ノ規定ヲ準用ス

地租條例中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ修正議決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也  
大正十五年二月二十一日

貴族院議長公爵德川家達殿

衆議院議長 粕谷義三

(小字及——ハ衆議院修正)

地租條例中左ノ通改正ス

第一條中「田畑 地價百分ノ四箇五」ヲ「田畑 地價百分三箇五」ニ、「田畑 地價百分ノ三箇二」ヲ「田畑 地價百分ノ二箇五」ニ改ム

第四條中「郡」及第三項ヲ削ル

第十三條ノ二 前條ノ規定ニ依リ地租ヲ納ムヘキ者(法人ヲ除ク)ノ同一<sup>○住所</sup>市町村<sup>○市町村及其隣接</sup>内ニ於ケル田畑地價ノ合計金額其ノ同居家族ノ分ト合算シ二百圓

未滿ナルトキハ<sup>○命令ノ定ムル所ニ依リ</sup>其ノ田畑ノ地租ヲ徵收セス但シ其ノ住所<sup>○小作ニ付シタル</sup>地以外ノ市町村ニ於ケル田畑ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附 則

本法ハ大正十五年分地租ヨリ之ヲ適用ス

明治三十七年法律第十二號中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕 谷 義 三

貴族院議長公爵德川家達殿

明治三十七年法律第十二號中左ノ通改正ス

第三條ノ二 市町村ハ前條ノ報告ト同時ニ地租條例第十三條ノ二ノ規定ニ

依リ地租ヲ徵收セサル田畑ノ地價ヲ所轄收稅官廳ニ報告スヘシ

附 則

本法ハ大正十五年分地租ヨリ之ヲ適用ス

參照

地租徵收ニ關スル法律<sup>明治三十七年四月 法律第十二號(抄)</sup>

第三條 市町村ハ地租ノ納期毎ニ其ノ開始前十五日マテニ地價及地租ノ總額並ニ其ノ各納期ニ於ケル納額ヲ所轄收稅官廳ニ報告スヘシ但シ前報告

後異動ナキトキハ此ノ限ニ在ラス

納期開始前十五日ヨリ納期開始マテニ地租額ニ異動ヲ生シタルトキハ其ノ異動額ヲ所轄收稅官廳ニ報告スヘシ

營業稅法廢止法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕 谷 義 三

貴族院議長公爵德川家達殿

營業稅法ハ之ヲ廢止ス

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年分以前ノ營業稅ニ關シテハ仍舊法ニ依ル但シ大正十六年一月一日以後ニ於テハ營業稅調查委員會又ハ營業稅審查委員會ノ事務ハ所得稅法ノ所得調查委員會又ハ所得審查委員會之ヲ行フ

大正十五年分營業稅ニ關シテハ營業稅法ニ依リ算出シタル稅額ノ百分ノ八ヲ免除ス

營業收益稅法案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕 谷 義 三

貴族院議長公爵德川家達殿

營業收益税法

第一條 本法施行地ニ本店、支店其ノ他ノ營業場ヲ有スル營利法人ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

第二條 本法施行地ニ營業場ヲ有シ左ニ掲クル營業ヲ爲ス個人ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

一 物品販賣業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ販賣ヲ含ム)

二 銀行業

三 無盡業

四 金錢貸付業

五 物品貸付業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ貸付ヲ含ム)

六 製造業(瓦斯電氣ノ供給、物品ノ加工修理ヲ含ム)

七 運送業(運送取扱ヲ含ム)

八 倉庫業

九 請負業

十 印刷業

十一 出版業

十二 寫真業

十三 席貸業

十四 旅人宿業(下宿ヲ含ミ木賃宿ヲ含マス)

十五 料理店業

十六 周旋業

十七 代理業

十八 仲立業

十九 問屋業

第三條 營業收益稅ハ營業ノ純益ニ付之ヲ賦課ス

第四條 法人ノ純益ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ

依ル

法人カ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第五條 合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ純益ニ付營業收益稅ヲ納ムル義務アルモノトス

第六條 個人ノ純益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ前年一月一日ヨリ引續キ爲シタルニ非サル營業ニ付テハ其ノ年ノ豫算ニ依リ計算ス

相續シタル營業ニ付テハ相續人カ引續キ之ヲ爲シタルモノト看做シテ其ノ純益ヲ計算ス

資本利子稅ヲ課セラルヘキ資本利子ハ之ヲ純益ニ算入セス

第七條 左ニ掲クル營業ノ純益ニハ營業收益稅ヲ課セス

一 政府ノ發行スル印紙切手類ノ賣捌

二 度量衡ノ製作、修覆又ハ販賣

三 自己ノ採掘シ又ハ採取シタル礦物ノ販賣

四 新聞紙法ニ依ル出版

五 本法施行地外ニ在ル營業場ニ於テ爲ス營業

六 法人ノ漁業又ハ演劇興業

七 個人ノ自己ノ收獲シタル農産物、林産物、畜産物若ハ水産物ノ販賣

又ハ之ヲ原料トスル製造但シ特ニ營業場ヲ設ケテ爲ス販賣又ハ製造ヲ除ク

第八條 勅令ヲ以テ指定スル重要物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ營業ヨリ生スル純益ニ付營業收益稅ヲ免除ス

第九條 個人ノ純益金額四百圓ニ滿タサルトキハ營業收益稅ヲ課セス  
 第十條 營業收益稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス

法人 百分ノ三・六  
 個人 百分ノ二・八

法人カ各事業年度ニ於テ納付シタル地租額又ハ資本利子稅額ハ命令ノ定  
 ムル所ニ依リ當該事業年度ノ營業收益稅額ヨリ之ヲ控除ス

個人カ其ノ營業用ノ土地ニ付納付シタル地租額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ  
 其ノ營業收益稅額ヨリ之ヲ控除ス

前二項ノ場合ニ於テ控除スヘキ地租又ハ資本利子稅ハ純益計算上之ヲ損  
 金又ハ必要經費ニ算入セス

第十一條 納稅義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ純益金額ヲ政府ニ申  
 告スヘシ

第十二條 納稅義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ  
 純益金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第十三條 法人ノ純益金額ハ第十一條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申  
 告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ個人  
 ノ純益金額ハ所得稅法ノ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決  
 定ス

所得調査委員會閉會後個人ノ純益金額ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シ  
 タルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調査委員會ノ  
 調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後個人ノ營業ニ付納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ純  
 益金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ  
 於テ其ノ純益金額ヲ決定ス

第十四條 稅務署長ハ毎年個人ノ營業ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ純益  
 金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス  
 第十五條 所得稅法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ純益金額ノ決議及決  
 定ニ付之ヲ準用ス

第十六條 第十三條又ハ前條ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタルトキハ政  
 府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十七條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル純益金額ニ對シ  
 テ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ  
 政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セス  
 第十八條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ  
 決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用  
 ス

第十九條 個人ノ營業ニ付納稅義務アル者純益金額二分ノ一以上減損アル  
 トキハ政府ニ純益金額ノ更訂ノ請求ヲ爲スコトヲ得但シ翌年一月三十一  
 日ヲ過キタルトキハ此ノ限ニ在ラス

純益金額決定後營業繼續ニ因リ純益金額ノ減損シタル場合ハ前項ノ規定  
 ヲ適用セス

第二十條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ純益金額ヲ査覈シ二分  
 ノ一以上ノ減損アルトキハ之ヲ更訂ス

第二十一條 納稅義務者第十八條ノ決定又ハ前條ノ更訂處分ニ對シ不服ア  
 ルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 法人ノ營業收益稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス  
 個人ノ營業收益稅ハ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第二十三條 第十九條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ更訂處分ノ確定スルニ至ル迄税金ノ徴收ヲ猶豫スルコトヲ得

第二十四條 個人ノ營業收益税ハ納稅義務者ノ住所地、住所ナキトキハ主タル營業場ノ所在地ヲ以テ納稅地トス但シ第三種ノ所得ニ付所得税ヲ納ムル者ニ在リテハ所得税ノ納稅地ヲ以テ營業收益税ノ納稅地トス

第二十五條 收稅官吏ハ營業ニ關スル帳簿物件ヲ検査シ又ハ營業者ニ質問スルコトヲ得

第二十六條 政府ハ同業組合其ノ他ノ營業者ノ團體ニ對シ營業收益税ニ關スル事項ヲ諮問スルコトヲ得

前項ノ諮問ヲ受ケタル團體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ調書ヲ提出スヘシ

第二十七條 所得税法第七十三條ノ二ノ規定ハ純益金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第二十八條 第二十五條ノ規定ニ依ル帳簿物件ノ検査ヲ妨ケ又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿ヲ提示シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ營業收益税ヲ連脱シタル者ハ其ノ連脱シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ個人ノ營業ニ付營業收益税ヲ連脱シタル者ノ純益金額ハ第十三條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徴收ス

第三十條 營業收益税ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

附 則

本法ハ大正十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス  
法人ノ大正十六年一月一日以後ニ終了スル事業年度ノ期間カ大正十五年ニ跨ルモノニ付テハ當該事業年度ノ純益金額ヨリ日割計算ノ方法ニ依リテ算出シタル大正十五年ニ屬スル期間ノ純益ヲ控除ス

資本金子税法案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也  
大正十五年二月二十一日

貴族院議長公爵德川家達殿

衆議院議長 粕谷 義三

資本金子税法

第一條 本法施行地ニ於テ資本金子ノ支拂ヲ受クル者ニハ本法ニ依リ資本金子税ヲ課ス

第二條 資本金子税ハ本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル左ノ資本金子ニ付之ヲ賦課ス

甲種 公債、社債、産業債券若ハ銀行預金ノ利子又ハ貸付信託ノ利益

乙種 第三種ノ所得ニ付納稅義務ヲ有スル者ノ第三種ノ所得中營業ニ非サル貸金又ハ預金ノ利子

本法ニ於テ貸付信託ト稱スルハ所得税法第三條ノ三ニ規定スル貸付信託ヲ謂フ

第三條 甲種ノ資本金子ハ其ノ支拂ヲ受クヘキ金額ニ依ル

第四條 乙種ノ資本金子ハ前年中ノ收入金額ニ依ル

被相續人ノ收入金額ハ之ヲ相續人ノ收入金額ト看做ス

第五條 甲種ノ資本金子ニシテ左ニ掲クルモノニハ資本金子税ヲ課セス

一 所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ第二種所得稅ヲ課セラレサル者ノ支拂ヲ受クル利子

二 貯蓄債券又ハ復興貯蓄債券ノ利子

第六條 資本利子稅ノ稅率ハ資本利子金額百分ノ二トス

信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財產ニ付納付シタル資本利子稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該貸付信託ノ利益ニ對スル資本利子稅額ヨリ之ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ資本利子稅ハ其ノ貸付信託ノ利益ニ之ヲ加算ス

第七條 乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ其ノ資本利子金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第八條 乙種ノ資本利子金額ハ所得稅法ノ所得調查委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調查委員會閉會後乙種ノ資本利子ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調查委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調查委員會閉會後乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ資本利子金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定ス

第九條 稅務署長ハ毎年乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ資本利子金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調查委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十條 所得稅法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ資本利子金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第十一條 第八條又ハ前條ノ規定ニ依リ乙種ノ資本利子金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十二條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル資本利子金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セス

第十三條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十四條 納稅義務者前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十五條 甲種ノ資本利子ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ資本利子稅ヲ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムヘシ

乙種ノ資本利子ニ付テハ資本利子稅ノ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第十六條 前條第一項ノ規定ニ依リ徵收スヘキ資本利子稅ヲ徵收セサルトキ又ハ其ノ徵收シタル税金ヲ納付セサルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第十七條 乙種ノ資本利子ニ付テハ第三種ノ所得ニ對スル所得稅ノ納稅地ヲ以テ資本利子稅ノ納稅地トス

第十八條 收稅官吏ハ調査上必要アルトキハ資本利子ノ支拂ヲ受ケ又ハ其ノ支拂ヲ爲スト認ムル者ニ質問スルコトヲ得

第十九條 詐僞其ノ他不正ノ行爲ニ因リ資本利子稅ヲ遁脫シタル者ハ其ノ遁脫シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者

又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ乙種ノ資本利子ニ付資本利子税ヲ逋脱シタル者ノ資本利子金額ハ第八條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徴收ス

第二十條 資本利子ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ資本利子税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

乙種ノ資本利子ニ付テハ大正十五年分資本利子税ヨリ本法ヲ適用ス但シ大正十五年ニ限り第七條中三月十五日トアルハ四月三十日、第十五條中其ノ年八月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ年九月一日ヨリ三十日限、第十條ノ規定ニ依ル期日五月三十一日トアルハ八月三十日トス

相續税法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷 義三

貴族院議長 公爵徳川家達殿

相續税法中左ノ通改正ス

第三條ノ二ヲ削ル  
第四條第二項中「船舶」及第一號ヲ削リ第二號ヲ第一號トシ以下順次繰上ク

第六條中「二千圓」ヲ「五千圓」ニ、「五百圓」ヲ「千圓」ニ改メ但書ヲ削ル  
第八條第一項ヲ左ノ如ク改ム

相續税ハ課税價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課ス

課 税 價 格	家 督 相 續		率
	稅	續	
五千圓以下ノ金額	相續人カ被相續人ノ家族タル直系卑屬ナルトキ	相續人カ被相續人ノ指定シタル者、民法第九百八十二條ニ依リ選定セラレタル者、被相續人ノ家族タル直系卑屬又ハ入夫ナルトキ	相續人カ民法第九百八十五條ニ依リ選定セラレタル者ナルトキ
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ五	千分ノ六	千分ノ八
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六	千分ノ七	千分ノ十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七	千分ノ八	千分ノ十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八	千分ノ十	千分ノ二十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十	千分ノ十五	千分ノ二十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十五	千分ノ二十	千分ノ三十
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ五十
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ四十	千分ノ六十
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十	千分ノ五十	千分ノ七十
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十	千分ノ六十	千分ノ八十
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十	千分ノ七十	千分ノ九十
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十	千分ノ八十	千分ノ百
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十	千分ノ九十	千分ノ百十

課稅價格	遺 産 相 續		
	專 屬 ナ ル ト キ	相 續 人 カ 直 系 者 又 ハ 直 系 尊 屬 ナ ル ト キ	相 續 人 カ 其 ノ 他 ノ 者 ナ ル ト キ
千圓以下ノ金額	千分、十	千分、十二	千分、十七
千圓ヲ超ユル金額	千分、十二	千分、十四	千分、二十
五千圓ヲ超ユル金額	千分、十四	千分、十七	千分、二十五
一萬圓ヲ超ユル金額	千分、十七	千分、二十	千分、三十五
二萬圓ヲ超ユル金額	千分、二十	千分、二十五	千分、四十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分、二十五	千分、三十五	千分、五十五
四萬圓ヲ超ユル金額	千分、三十五	千分、四十五	千分、六十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分、四十五	千分、五十五	千分、七十五
七萬圓ヲ超ユル金額	千分、五十五	千分、六十五	千分、八十五
十萬圓ヲ超ユル金額	千分、六十五	千分、七十五	千分、九十五
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分、七十五	千分、八十五	千分、百五
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分、八十五	千分、九十五	千分、百十五
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分、九十五	千分、百五	千分、百二十五
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分、百五	千分、百十五	千分、百三十五
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分、百十五	千分、百二十五	千分、百四十五
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分、百二十五	千分、百三十五	千分、百五十五
百萬圓ヲ超ユル金額	千分、百三十五	千分、百四十五	千分、百六十五
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分、百五十	千分、百六十	千分、百八十

三百萬圓ヲ超ユル金額	千分、百六十五	千分、百七十五	千分、百九十五
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分、百八十	千分、百九十	千分、二百十

第十七條中「五年」ヲ「七年」ニ改ム  
 第二十三條中「五百圓」ヲ「千圓」ニ、「被相續人カ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人」ヲ「親族」ニ改ム  
 第二十三條ノ二ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ場合ニ於テ受益者不特定ナルトキ又ハ未タ存在セサルトキハ委託者ノ直系卑屬ヲ受益者ト爲シタルモノト看做シ其ノ受託者ヲ相續財產管埋人ト看做ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

通行稅法廢止法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也  
 大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕 谷 義 三

貴族院議長公爵德川家達殿

通行稅法ハ之ヲ廢止ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
 本法施行前徵收シタル通行稅及徵收スヘカリシ通行稅ニ付テハ仍舊法ニ依ル

酒造税法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

酒造税法中左ノ通改正ス

第四條中「三十圓」ヲ「三十六圓」ニ、「三十三圓」ヲ「四十圓」ニ、「一圓二十五錢」ヲ「一圓五十錢」ニ、「一圓五十錢」ヲ「一圓八十錢」ニ改ム

第五條中「三十圓」ヲ「三十六圓」ニ、「三十三圓」ヲ「四十圓」ニ改ム

第三十五條ノ三 政府ハ酒造組合法ニ依リ設立シタル酒造組合ニ對シ徵稅

上必要ナル設備ヲ爲シ又ハ徵收事務ノ補助ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ得

前項ノ酒造組合ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ交付金ヲ交付スルコトヲ得

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

沖繩縣ニ於テ製造スル酒類ニ付テハ當分ノ内仍從前ノ例ニ依ル

沖繩縣ニ於テ製造シタル酒類ヲ帝國内ノ他ノ地方へ移出スルトキハ其ノ造

石稅ト本法ニ規定スル造石稅トノ差額ノ稅率ニ依リ出港稅ヲ課ス

前項ノ場合ニ於テハ權太酒類出港稅法第三條乃至第十二條ノ規定ヲ準用ス

酒精及酒精含有飲料税法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

酒精及酒精含有飲料税法中左ノ通改正ス

第二條中「一圓五十錢」ヲ「一圓八十錢」ニ、「三十五圓」ヲ「四十二圓」ニ改ム

第四條中「麥酒(ビール)」ヲ「麥酒(ビール)及清涼飲料」ニ改ム

第五條ノ二中「三十五圓」ヲ「四十二圓」ニ改ム

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

麥酒税法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

麥酒税法中左ノ通改正ス

第三條中「十八圓」ヲ「二十五圓」ニ改ム

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

醬油稅則廢止法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

醬油稅則ハ之ヲ廢止ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前造石數ヲ査定シタル醬油及査定スヘカリシ醬油ニ付テハ仍舊法ニ依ル但シ本法施行後廢棄ニ屬シタル醬油ニ付テハ舊法第十一條ノ規定ヲ、外國ニ輸出スル醬油ニ付テハ舊法第十三條ノ規定ヲ適用セス

自家用醬油稅法廢止法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

自家用醬油稅法ハ之ヲ廢止ス

附 則

本法ハ大正十五年分自家用醬油稅ヨリ之ヲ適用ス但シ自家用醬油製造者ニシテ大正十五年四月一日前其ノ製造シタル醬油ヲ販賣シ又ハ免許制限ヲ超過シテ醬油ヲ製造シタルモノニ付テハ仍舊法ニ依ル

織物消費稅法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

織物消費稅法中左ノ通改正ス

第一條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ綿織物ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第一條ノ二 本法ニ於テ綿織物ト稱スルハ全重量百分中九十五以上ノ綿ヲ以テ組成シ絹、人造絹、金屬絲、金屬線、金屬箔、漆絲又ハ漆箔ヲ交ヘサル織物ヲ謂フ

絹紡細絲、芭蕉絲其ノ他命令ヲ以テ定ムル原料ヲ以テ組成スル織物ニシテ命令ノ定ムルモノハ之ヲ綿織物ト看做ス

第二十三條 第十二條、第十四條乃至第十六條、第十八條第二號第四號及第十九條乃至第二十一條ノ規定ハ綿織物ニモ之ヲ適用ス

政府ニ申告セスシテ綿織物ヲ製造シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ニ掲クル綿織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

一 本法施行前消費稅ヲ課スヘカリシモノ

二 本法施行前外國輸出若ハ朝鮮移出ノ目的ヲ以テ又ハ織物消費稅法第七條ノ規定ニ依リテ消費稅ヲ納付セスシテ製造場又ハ保稅地域ヨリ引取リタルモノ

三 本法施行前消費稅ノ徵收ヲ猶豫シタルモノ

四 本法施行前消費稅ヲ納付シテ外國ニ輸出シ又ハ朝鮮ニ移出シタルモ  
消費稅ヲ納付シタル綿織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ本法施行後外國  
ニ輸出シ又ハ朝鮮ニ移出スルモ織物消費稅法第三條第二項ノ規定ヲ適用セ  
ス

#### 賣藥稅法廢止法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵德川家達殿

賣藥稅法ハ之ヲ廢止ス

#### 附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前印紙ヲ貼用スヘカリシ賣藥若ハ賣藥類似品又ハ外國輸出ノ爲ニ  
賣藥稅ヲ免除シタル賣藥若ハ賣藥類似品ニ付テハ仍舊法ニ依ル

賣藥營業者又ハ賣藥類似品營業者本法施行後其ノ所持ニ係ル賣藥又ハ賣藥  
類似品中性效ヲ失シタルモノヲ廢棄セムトスルトキハ命令ノ定ムル所ニ依  
リ既貼印紙稅額ノ五割ニ相當スル金額ノ交付ヲ政府ニ請求スルコトヲ得但  
シ本法施行後二年ヲ過キタルトキハ此ノ限ニ在ラス

#### 骨牌稅法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵德川家達殿

骨牌稅法中左ノ通改正ス

#### 第三條 削除

第四條 骨牌ニハ一組毎ニ麻雀ニ在リテハ三圓、其ノ他ニ在リテハ五十錢  
ノ稅ヲ課ス

#### 第十三條 削除

第二十一條ノ二 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル骨牌ハ本法ト同一  
又ハ之ヨリ高キ稅率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ之ヲ本法  
施行地ニ移入スルコトヲ得ス

前項ノ規定ニ違反シテ骨牌ヲ移入シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ  
骨牌ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

#### 第二十六條ヲ削ル

#### 附 則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前骨牌製造ノ免許ヲ受ケタル者ノ大正十五年分以前ノ免許料ニ付  
テハ仍從前ノ例ニ依ル

本法施行ノ際骨牌ノ製造又ハ販賣ヲ爲ス者ノ所持ニ係ル骨牌ニハ製造又ハ  
販賣ヲ爲ス者ニ於テ第四條ノ改正規定ニ依リ相當印紙ヲ貼用シ又ハ不足印  
紙ヲ増貼スヘシ

#### 清涼飲料稅法案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

衆議院議長 粕谷義三

貴族院議長公爵德川家達殿

#### 清涼飲料稅法

第一條 本法ニ於テ清涼飲料ト稱スルハ炭酸瓦斯ヲ含有スル飲料ヲ謂フ但

シ全重量ノ萬分ノ五以下ノ炭酸瓦斯ヲ含有スルモノ及全容量ノ百分ノ一

以上ノ純酒精ヲ含有スルモノハ此ノ限ニ在ラス  
前項ニ於テ純酒精ト稱スルハ攝氏十五度ノ時ニ於テ〇・七九四七ノ比重

ヲ有スル酒精ヲ謂フ

第二條 清涼飲料ニハ左ノ區分ニ依リ清涼飲料稅ヲ課ス

第一種 玉ラムネ壘詰ノモノ 一石ニ付 七圓

第二種 其ノ他ノ壘詰ノモノ 一石ニ付 十圓

第三種 壘詰以外ノモノ 炭酸瓦斯使用量一疋ニ付 三圓

第三條 清涼飲料ヲ製造セムトスル者ハ製造場一箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受

クヘシ其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

天然ニ湧出スル清涼飲料ヲ容器ニ充填スルコトハ本法ノ適用ニ付テハ之

ヲ第二種ノ清涼飲料ノ製造ト看做ス天然ニ湧出スル清涼飲料ヲ原料トシ

テ第三種ノ清涼飲料ヲ製造スルコト亦同シ

第四條 清涼飲料稅ハ第一種及第二種ノ清涼飲料ニ付テハ製造場外ニ移出

セラレタル石數ニ應シ、第三種ノ清涼飲料ニ付テハ製造場外ニ移出セラ

レタル清涼飲料ニ使用セラレタル炭酸瓦斯ノ量ニ應シ清涼飲料製造者ヨ

リ之ヲ徵收ス

第五條 清涼飲料ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ之ヲ製造場外ニ

移出セラレタルモノト看做ス

一 製造場内ニ於テ飲用セラレタルトキ

二 製造場内ニ現存スルモノ公賣セラレタルトキ

三 製造免許取消ノ場合ニ於テ製造場内ニ現存スルトキ

第六條 清涼飲料製造者ハ毎月其ノ製造場外ニ移出シタル清涼飲料ニ付第

二條ノ區分毎ニ其ノ石數又ハ炭酸瓦斯使用量ヲ記載シタル申告書ヲ翌月

十日迄ニ政府ニ提出スヘシ但シ前條第二號又ハ第三號ノ場合ニ於テハ直

ニ之ヲ提出スヘシ

申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政

府ハ課稅標準額ヲ決定ス

第七條 清涼飲料稅ハ毎月分ヲ翌月末日迄ニ納付スヘシ但シ第五條第二號

又ハ第三號ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ納付スヘシ

第八條 清涼飲料製造者カ外國ニ輸出スル目的ヲ以テ製造場外ニ移出スル

清涼飲料ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ清涼飲料稅ヲ免除ス

前項ノ清涼飲料ニシテ製造場外ニ移出セラレタル後六月以内ニ外國ニ輸

出セラレタルコトノ證明ナキモノニ付テハ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ徵收ス

但シ天災其ノ他已ムコトヲ得サル事由ニ因リ亡失シタルモノニ付政府ノ

承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條 前條第一項ノ清涼飲料ハ之ヲ内地ニ於テ消費シ又ハ内地ニ於テ消

費スル目的ヲ以テ讓渡スルコトヲ得ス但シ已ムコトヲ得サル事由ニ因リ

政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ承認ヲ受ケタルトキハ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ納付スヘシ

第十條 政府ハ清涼飲料稅ニ付必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ

依リ納稅ノ保證トシテ清涼飲料製造者ニ對シ擔保ヲ提供セシムルコトヲ

得

第十一條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ハ清涼飲料ノ製造出人ニ關スル事

實ヲ詳細明瞭ニ帳簿ニ記載スヘシ

清涼飲料ノ製造者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ清涼飲料ノ製造ニ關シ必要ナ

ル事項ヲ政府ニ申告スヘシ

第十二條 收稅官吏ハ清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ノ所持ニ係ル清涼飲

料、其ノ製造出入ニ關スル一切ノ帳簿書類及清涼飲料ノ製造又ハ販賣上

必要ナル建築物、器具、器械、原料其ノ他ノ物件ヲ検査シ又ハ監督上必

要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第十三條 製造免許ヲ受ケスシテ清涼飲料ヲ製造シタル者ハ千圓以下ノ罰

金ニ處シ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ徵收ス

前項ノ清涼飲料並其ノ容器、器具及器械ハ之ヲ沒收ス

第十四條 清涼飲料ノ製造者第六條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐リタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ヲ以テ清涼飲料稅ヲ遁脱シ又ハ遁脱ヲ圖リタル者ハ其ノ清涼飲料稅五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ清涼飲料稅ヲ徵收ス但シ罰金額カ二十圓ニ滿タサルトキハ之ヲ二十圓トス

第十六條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者清涼飲料ノ製造出入ニ關スル帳簿書類若ハ原料ヲ隱匿シ又ハ帳簿記載若ハ第十一條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ若ハ詐リタルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第十七條 收稅官吏ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、妨ケ若ハ忌避シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第十八條 清涼飲料ノ製造者又ハ販賣者ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法ヲ犯シタルトキハ其ノ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス

第十九條 第十條ノ規定ニ依ル擔保ヲ提供セサル者、第十四條若ハ第十五條ノ規定ニ依リテ處罰若ハ處分セラレタル者又ハ三年以上引續キ清涼飲料ヲ製造セサル者ニ對シテハ政府ハ清涼飲料製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

第二十條 本法ヲ施行セサル地ニ於テ製造シタル清涼飲料ハ本法ト同一ノ稅率ヲ有スル法規ヲ其ノ地ニ於テ施行スル迄ハ之ヲ本法施行地ニ移入スルコトヲ得ス

前項ノ規定ニ違反シテ清涼飲料ヲ移入シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處シ直ニ其ノ石數ニ應シ第二條第二種ノ稅率ニ依リ算出シタル清涼飲料稅ヲ徵收ス

前項ノ清涼飲料及其ノ容器ハ何人ノ所有ニ屬スルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第二十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九

條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ第十七條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 第十一條、第十二條、第十六條乃至第十八條及第二十一條ノ規定ハ販賣ノ目的ヲ以テ炭酸瓦斯ヲ製造スル者又ハ炭酸瓦斯ヲ販賣スル者ニ付之ヲ準用ス

第二十三條 自己又ハ其ノ家族ノ用ニ供スル清涼飲料ノミヲ製造スル者ニハ本法ヲ適用セス

附 則  
本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ヨリ引續キ清涼飲料ヲ製造スル者本法施行後一月以内ニ其ノ旨政府ニ申告スルトキハ本法施行ノ日ヨリ本法ニ依リ製造免許ヲ受ケタルモノト看做ス

大正九年法律第五十一號中改正法律案  
右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也  
大正十五年二月二十一日

衆議院議長 柏谷義三

貴族院議長公爵徳川家達殿

大正九年法律第五十一號中「酒精含有飲料」ノ下ニ「清涼飲料」ヲ加ヘ「醬油」及「石油、賣藥、賣藥類似品」ヲ削ル

附 則  
本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前朝鮮ニ移出シタル醬油、賣藥及賣藥類似品ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

參照  
内地臺灣又ハ樺太ヨリ朝鮮ニ移出スル物品ノ内國稅免除ニ關スル法

貴族院議事速記錄第十四號

大正十五年二月二十四日 所得稅法中改正法律案外二十件 第一讀會

二六七

律 大正九年八月法  
律第五十一號

左ニ掲クル物品ニシテ内地、臺灣又ハ樺太ヨリ朝鮮ニ移出スルモノニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ内國稅ヲ免除若ハ拂戻シ又ハ交付金ヲ交付スルコトヲ得

酒類、麥酒、酒精、酒精含有飲料、醬油、砂糖、糖蜜、糖水、織物、織物製品、石油、賣藥、賣藥類似品、骨牌

地方稅ニ關スル法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

貴族院議長公爵徳川家達殿

衆議院議長 粕谷 義三

第一條 北海道、府縣ハ本法ニ依リ特別地稅、家屋稅、營業稅及雜種稅ヲ

賦課スルコトヲ得

第二條 特別地稅ハ地租條例第十三條ノ二ノ規定ニ依リテ地租ヲ徵收セサル田畑ニ對シ地租條例第一條ノ地價ヲ標準トシテ之ヲ賦課ス

特別地稅ノ徵收ニ關シテハ地租條例第十三條ノ規定ヲ準用ス

第三條 特別地稅ノ賦課率ハ北海道ニ在リテハ地價百分ノ二・六以内、府縣ニ在リテハ地價百分ノ三・七以内トス

特別地稅ニ對シ市町村其ノ他ノ公共團體ニ於テ賦課スヘキ附加稅ノ賦課率ハ前項ニ規定スル制限ノ百分ノ八十以内トス

第四條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第二條ノ例ニ依リ地價百分ノ二・九ノ外其ノ分賦金額以内ニ限り前條第一項ニ規定スル制限ニ達スル迄特別地稅ヲ賦課スルコトヲ得

北海道地方費又ハ府縣費ノ一部ノ分賦ヲ受ケタル市町村ハ前條第二項ニ規定スル制限ノ外其ノ分賦金額以内ニ限り特別地稅附加稅ヲ賦課スルコ

トヲ得但シ北海道、府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ合算額ハ前條第一項ニ規定スル制限ヲ超ユルコトヲ得ス

第五條 特別地稅又ハ其ノ附加稅ト段別割トヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ第三條又ハ前條ノ規定ニ依リテ其ノ地目ノ土地ニ對シ賦課シ得ヘキ制限額ト特別地稅額又ハ其ノ附加稅額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條 特別地稅又ハ其ノ附加稅ノ賦課カ第三條乃至前條ニ規定スル制限ニ達シタル場合ニ非サレハ明治四十一年法律第三十七號第五條ノ規定ニ依ル地租、營業收益稅又ハ所得稅ノ附加稅ノ制限外課稅ヲ爲スコトヲ得ス

特別地稅又ハ其ノ附加稅ト段別割トヲ併課シタル場合ニ於テ一地目ニ對スル賦課カ前條ニ規定スル制限ニ達シタルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ特別地稅又ハ其ノ附加稅カ制限ニ達シタルモノト看做ス

第七條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ第三條乃至第五條ニ規定スル制限ヲ超過シ其ノ百分ノ十二以内ニ於テ特別地稅又ハ其ノ附加稅ヲ賦課スルコトヲ得

左ニ掲クル場合ニ於テハ特ニ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ前項ニ規定スル制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得

一 内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ

二 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ

三 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ

四 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ  
前二項ノ規定ニ依リ制限ヲ超過シテ課稅スルハ營業收益稅及所得稅ノ附加稅ノ賦課カ明治四十一年法律第三十七號第二條及第三條ニ規定スル制限ニ達シタルトキニ限ル

第八條 特別地稅及其ノ附加稅ノ賦課率ハ當該年度ノ豫算ニ於テ定メタル

田畑ニ對スル地租附加税ノ賦課率ヲ以テ算定シタル地租附加税額ノ當該田畑ノ地價ニ對スル比率ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條 家屋税ハ家屋ノ賃貸價格ヲ標準トシテ家屋ノ所有者ニ之ヲ賦課ス  
第十條 家屋ノ賃貸價格ハ家屋税調査委員ノ調査ニ依リ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ決定ス

第十一條 左ニ掲クル家屋ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ家屋税ヲ賦課セサルコトヲ得  
一 一時ノ使用ニ供スル家屋  
二 賃貸價格一定額以下ノ家屋

三 公益上其ノ他ノ事由ニ因リ課税ヲ不適當トスル家屋  
第十二條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第九條乃至前條ノ例ニ依リ家屋税ヲ賦課スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ市長之ヲ行フ

第十三條 家屋税及其ノ附加税ノ賦課率及賦課ノ制限並家屋ノ賃貸價格ノ算定及家屋税調査委員ノ組織ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
第十四條 營業税ハ營業收益税ノ賦課ヲ受ケサル營業者及營業收益税ヲ賦課セサル營業ヲ爲ス者ニ之ヲ賦課ス

第十五條 營業税ヲ賦課スヘキ營業ノ種類ハ營業收益税法第二條ニ掲クルモノ及勅令ヲ以テ定ムルモノニ限ル  
第十六條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第十四條及前條ノ例ニ依リ營業税ヲ賦課スルコトヲ得

第十七條 第十一條第三號ノ規定ハ營業税ニ之ヲ準用ス  
第十八條 營業税ノ課税標準並營業税及其ノ附加税ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 雜種税ヲ賦課スルコトヲ得ヘキモノノ種類ハ勅令ヲ以テ定ムルモノ並内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル  
第二十條 第十一條第三號ノ規定ハ雜種税ニ之ヲ準用ス

第二十一條 雜種税ノ課税標準並雜種税及其ノ附加税ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條 市町村ハ本法ニ依リ戸數割ヲ賦課スルコトヲ得  
第二十三條 戸數割ハ一戸ヲ構フル者ニ之ヲ賦課ス

戸數割ハ一戸ヲ構ヘサルモ獨立ノ生計ヲ營ム者ニ之ヲ賦課スルコトヲ得  
第二十四條 戸數割ハ納税義務者ノ資力ヲ標準トシテ之ヲ賦課ス

第二十五條 戸數割ノ課税標準タル資力ハ納税義務者ノ所得額及資産ノ狀況ニ依リ之ヲ算定ス

第二十六條 第十一條第三號ノ規定ハ戸數割ニ之ヲ準用ス  
第二十七條 戸數割ノ賦課ノ制限、納税義務者ノ資産ノ狀況ニ依リ資力ヲ算定シテ賦課スヘキ額其ノ他納税義務者ノ資力算定ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十八條 北海道府縣以外ノ公共團體ニ對スル第七條ノ許可ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

#### 附 則

本法ハ大正十五年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ家屋税營業税及雜種税其ノ附加税並戸數割ニ關スル規定ハ大正十六年度分ヨリ之ヲ適用ス  
明治十三年第十六號布告及同年第十七號布告ハ大正十五年度分限り之ヲ廢止ス

第六條及第七條中營業收益税トアルハ大正十五年度分特別地稅及其ノ附加税ニ付テハ國稅營業税トス  
家屋税ハ大正十八年度分迄ニ限り第九條乃至第十二條ノ規定ニ拘ラス別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ賦課スルコトヲ得

明治四十一年法律第三十七號中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ修正議決セリ因テ議院法第五十四條ニ依リ及送付候也

大正十五年二月二十一日

貴族院議長公爵德川家達殿

衆議院議長 粕谷義三

明治四十一年法律第三十七號中左ノ通改正ス

(小字及一ハ衆議院修正)

第二條第一號中「其ノ他ノ土地地租百分ノ八十三」ヲ「田畑地租百分ノ百七  
其ノ他ノ土地地租百分ノ八十三」

ニ、「其ノ他ノ土地ニ在リテハ百分ノ八十三」ヲ「田畑ニ在リテハ百分ノ百

七、其ノ他ノ土地ニ在リテハ百分ノ八十三」ニ改ム

同條第二號中「其ノ他ノ土地地租百分ノ六十六」ヲ「田畑地租百分ノ八十五  
其ノ他ノ土地地租百分ノ六十六」

ニ、「其ノ他ノ土地ニ在リテハ百分ノ六十六」ヲ「田畑ニ在リテハ百分ノ八

十五、其ノ他ノ土地ニ在リテハ百分ノ六十六」ニ改ム

第二條中「營業稅附加稅ヲ課スルノ外營業稅ヲ納ムル者」ヲ「營業收益稅

附加稅ヲ課スルノ外營業收益稅ヲ納ムル者」ニ、「營業稅百分ノ四十一」ヲ

「營業收益稅百分ノ四十三」ニ、「營業稅百分ノ六十一」ヲ「營業收益稅百分ノ

六十三」ニ改ムメ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

營業收益稅附加稅ノ賦課ニ付テハ營業收益稅法第十條第二項ノ規定ニ依ル資本利子稅額ノ控除

ヲ爲ササルモノヲ以テ營業收益稅額ト看做ス

第三條第一項ヲ左ノ如ク改ム

北海道、府縣ハ所得稅百分ノ二十四以內ノ所得稅附加稅ヲ課スルノ外所  
得稅ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

北海道府縣以外ノ公共團體ハ府縣費ノ全部又ハ一部ノ分賦ヲ受ケタル場  
合ヲ除クノ外所得稅ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

戶數割ヲ賦課シ難キ市町村ニ於テハ前項ノ規定ニ拘ラス内務大臣  
ノ許可ヲ受ケ所得稅附加稅ヲ課スルコトヲ得但シ其ノ賦課率ハ所得稅百

分ノ七ヲ超ユルコトヲ得ス

所得稅附加稅ノ賦課ニ付テハ所得稅法第二十一條第二項ノ規定ニ依ル第二種ノ所得稅額ノ控除

ヲ爲ササルモノヲ以テ第一種ノ所得稅額ト看做ス

附 則

本法ハ大正十五年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ。第三條第一項ノ改正規定中第四項ノ規  
定及附則第二項ノ規定ハ第二條及第三條ノ改正規定ハ

大正十六年度分ヨリ之ヲ適用ス

營業稅法廢止法律ニ依リテ免除セララル營業稅額ハ大正十五年度分營業稅  
附加稅ノ賦課ニ付テハ免除セラレサルモノト看做ス

本法公布ノ日迄ニ北海道、府縣其ノ他ノ公共團體カ地租附加稅又ハ段別割ニ  
付制限外課稅ノ許可ヲ受ケタル場合ニ於テハ其ノ制限外ノ賦課率又ハ賦課  
額ハ之ヲ本法ニ依リテ許可ヲ受ケタル制限外ノ賦課率又ハ賦課額ト看做ス

參照

地方稅制限ニ關スル法律明治四十一年三月  
法律第三十七號(抄)

第一條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以內ノ地租附加稅又ハ

段別割ヲ課スルノ外土地ニ對シテ課稅スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣

附加稅ノミヲ課スルトキ

宅地地租百分ノ三十四

其ノ他ノ土地地租百分ノ八十三

段別割ノミヲ課スルトキ

一段歩ニ付 毎地目平均金一圓

附加稅及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目

ノ地租額宅地ニ在リテハ百分ノ三十四其ノ他ノ土地ニ在リテハ百

分ノ八十三ト附加稅額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

二 其ノ他ノ公共團體

附加稅ノミヲ課スルトキ

宅地地租百分ノ二十八

其ノ他ノ土地地租百分ノ六十六

段別割ノミヲ課スルトキ

一段歩ニ付 毎地目平均金一圓

附加税及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額宅地ニ在リテハ百分ノ二十八、其ノ他ノ土地ニ在リテハ百分ノ六十六ト附加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ營業稅附加稅ヲ

課スルノ外營業稅ヲ納ムル者ノ營業ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣 營業稅百分ノ四十一

二 其ノ他ノ公共團體 營業稅百分ノ六十一

第三條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ所得稅附加稅ヲ

課スルノ外所得稅ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課稅スルコトヲ得ス

一 北海道、府縣 所得稅百分ノ三、六

二 其ノ他ノ公共團體 所得稅百分ノ十四

第二種ノ所得ニ對シテハ附加稅ヲ課スルコトヲ得ス

〔國務大臣濱口雄幸君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(濱口雄幸君) 諸君、茲ニ議題トナリマシタル國稅ノ整理ニ關スル諸法律案、即チ所得稅法中改正法律案外十八件ノ法律案ニ付キ一括シテ說明ヲ致サウト思ヒマス、凡ソ租稅ハ國家歲入ノ最モ重要ナル部分ヲ占メテ居リマシテ、財政上極メテ重大ナル關係ヲ有スルコトハ勿論、租稅制度ノ如何ト云フコトハ直チニ國民經濟生活ノ各方面ニ密接深甚ノ影響ヲ及ボスモノデアルコトハ敢テ言フヲ俟タザル所デアリマス、歐米諸國ニ於テ戰時並ニ戰後ノ財政ヲ處理スルニ當リマシテ、特ニ租稅ノ制度ニ意ヲ用井、其整理ニ努力シテ居リマスノハ、實ニ之ガ爲デアルト申スベキデアリマス、竊テ我國ノ租稅制度ヲ見マスルニ、明治ノ初年、庶政ノ改革ニ伴ヒ、地租ノ改正ヲ遂行イタシ、各種租稅ノ改廢ヲ行ヒマシテヨリ此方、必要ニ應ジテ改正ヲ加ヘラレ、就中、日清日露ノ兩戰役ヲ經テ、或ハ戰費ヲ支辨スルガため、或ハ戰後ノ經營ニ充ツルガため、各種ノ租稅ノ創設又ハ増徴セラレマシタモノガ尠ナクナイノデアリマス、其間、必シモ常ニ理論ノ要求ヲ一貫シテ居ルノデアリマセヌ、又施行ノ當初ニ於テ適當デアリマシタ所ノ租稅ト雖モ、時代ノ推移ニ伴

ヒマシテ今日ニ於テハ必シモ適當ナラズト認メラル、モノモアルノデアリマス、殊ニ沿革的ニ發達シ來リタル結果ト致シマシテ、各稅ノ間、聯絡統一ヲ缺クモノガアリマスルノミナラズ、最近社會上、經濟上ノ情態ニ照シマスレバ、國民ノ租稅ノ負擔ハ必シモ公正ニシテ均衡ヲ得タリト云フコトガ出來ナイノデアリマス、就中、直接國稅ニ在リマシテハ其創設ニ前後ハアリマスルガ、租稅ノ本質ト國民經濟ノ發達ニ伴ヒマシテ、自然、所得稅ガ其中樞ノ地位ヲ占メマシテ、地租營業稅ハ其兩翼トナツテ是ガ補完ノ作用ヲナスニ至ツテ居ルノデアリマスケレドモ、是等各稅ノ組織内容ニ於キマシテ重大ナル缺點ガアリマスルノミナラズ、土地及營業以外ノ資産所得ヲ逸シテ居リマスル結果、未ダ理論的體系ヲ整フルニハ至ツテ居ナイノデアリマス、間接國稅ニ在リマシテモ是ガ發達ハ主トシテ沿革ニ基クモノデアリマシテ、其課稅物件ノ選擇ハ現今ノ社會事情ニ適合セザルモノガ尠ナクナイノデアリマス、是ニ於テカ、我國租稅制度ヲ一般的ニ整理スルノ必要デアルト云フコトハ、實ニ朝野多年ノ問題デアッタノデアリマス、既往ノ内閣中、是ガ解決ノ爲ニ相當努力シタモノモアリハ致シマシタケレドモ、今日ニ至リマスマデ未ダ之ヲ完成スルニ至ラナカッタノデアリマス、蓋シ稅制ノ整理ハ國家國民ノ爲ニ極メテ重大ナル問題デアルト同時ニ、是ガ實行ハ容易ナラザル難事業デアリマスルガ故ニ、苟モ稅制ノ整理ヲ實行スルニ當リマシテハ、局ニ當リマス者ノ慎重ナル注意ト周到ナル調査ヲ要スベキコトハ勿論デアリマスルケレドモ、國家各種ノ機關ヲ初メ、各方面ノ人々モ亦誠意ヲ以テ之ヲ助ケ、互ニ相協力シテ是ガ遂行ヲ期スルニアラズンバ、到底、其達成ヲ期スルコトハ出來ナイノデアリマス、或ハ徒ラニ理論ニ拘泥シテ、イツマデモ其實行ヲ躊躇シ、或ハ自己ノ利害ヲ主トシテ各、其主張ヲ固執イタシ、整理ノ實行ヲ遷延セシムルガ如キハ、決シテ國家國民ノ爲ニ忠實ナル所以ニアラズト思フノデアリマス、政府ハ我國財政上、經濟上及社會上ノ狀態ニ照ラシ速ニ全般ニ互ツテ稅制ヲ整理スルノ必要緊切ナルコトヲ認メマシテ、前議會ニ於テ是ガ實行ノ意圖アル旨ヲ聲明イタシ、爾來、各種ノ方面ヨリ調査研究ヲ進メ、實行的成案ヲ得ルニ努力イタシマシタ結果、茲ニ所得稅法中改正法律案外十八件ノ法律案ヲ提出イタシマシテ、諸君ノ御協賛ヲ求ムルノ運ビニ立至ッタノデアリマス、今回ノ稅制整理ノ綱要ハ、先ヅ第一ニ直接國稅ノ體系ハ大體、現在ノ制度ヲ是認イタシマシテ、一般所得稅ヲ中樞トシ、之ニ適當ナル改正ヲ施シ、地租ニ相當ノ改善ヲ

加ヘテ之ヲ存置シ、現行營業稅ハ之ヲ廢止シ、之ニ代フルニ營業收益稅ヲ以テシ、新ニ資本利子稅ヲ設ケテ、以テ稅制ノ體系ヲ整ヘ、負擔ノ公平ヲ圖ルコトニ致シマシタ、第二ニハ通行稅、醬油稅、賣藥稅ヲ廢止シ、綿織物ニ對スル織物消費稅ヲ免除イタシマシテ、中産階級以下多數國民ノ生活上ノ負擔ヲ輕減スルニ努メ、第三ニハ是等諸稅ノ改廢ニ因ル所ノ財源ノ不足ヲ補填セムガ爲ニ、相續稅及酒類ニ對スル租稅ノ増率ヲ行ヒ、煙草ノ定價ヲ引上ゲ、上ニ述ベマシタ所ノ資本利子稅ノ外ニ、新ニ清涼飲料稅ヲ設ケムトスルニアルノデアリマス、稅制ノ整理ニ著手セムトスルニ當リマシテ、政府ガ最初ニ考慮イタシマシタル點ハ、稅制整理ニ因ル歲入總額ノ増減如何ノ點ニ在リタノデアリマス、蓋シ經濟界今日ノ事情ト國民負擔ノ現況ニ照シ、此際、稅制整理ニ依ッテ増稅ヲ行フト云フコトノ不可ナルコトハ勿論、若シ出來得ベクンバ減稅ノ整理ヲ斷行イタシマシテ、國民負擔ノ輕減ヲ圖リタイト云フコトハ、政府ノ最モ希望スル所デアリマスルケレドモ、我國財政ノ現狀ハ到底歲入ノ減少ヲ伴フベキ減稅ノ整理ヲ行ヒ得ルノ餘裕ノナイコトヲ遺憾トスル者デアリマス、御承知ノ如ク、政府ハ行政財政ノ整理緊縮ヲ以テ主要ナル政綱ノ一ト致シ、大正十四年度ノ豫算編成ニ當リ、萬難ヲ排シテ出來得ルダケ是ガ實現ヲ圖リ、前議會ニ於キマシテ幸ニ諸君ノ御協賛ヲ得マシテ、財政ノ基礎ヲ鞏固ニ致シ經濟界ニ對スル壓迫ヲ緩和スルコトヲ得タノデアリマス、政府ハ大正十五年度ノ豫算編成ニ當リマシテモ、依然トシテ緊縮ノ方針ヲ持續シ居リマスルガ、而モ一面ニ於テ幾多懸案ノ解決ヲ要スルモノガアリマス、其他緊急避クベカラザル所ノ經費モ亦少ナクナイノデアリマス、從テ此上、國家ノ歲入ヲ著シク減少セシメムトスルガ如キハ、財政ノ現狀ニ照シテ到底不可能ノコトデアアルノデアリマス、茲ヲ以テ今回ノ稅制整理ハ歲入ニ著シキ増減ナカラシムル範圍内ニ於テ之ヲ實行スルコトト致シタ次第デアリマス、次ニ今回ノ稅制整理ニ關シテ特ニ考慮ヲ費シマシタル點ハ、直接國稅ノ體系ヲ如何ニ組織スベキカノ問題デアッタノデアリマス、此點ニ關シマシテハ、世上種種ノ議論ヲ試ムル者ガアリマスケレドモ、稅制整理ノ事業ハ机上ノ空論ヲ許サナイノデアリマシテ、直チニ採ッテ以テ國政ノ上ニ施行シ得ベキ實行のモノデナケレバナラスト思フノデアリマス、政府ハ慎重ナル調査講究ヲ遂ゲマシタル結果、諸般ノ狀況ニ照ラシ直接國稅ノ體系ハ大體ニ於テ現行ノ制度ヲ是認シ、一般所得稅ヲ中樞トシ地租、營業收益稅及資本利子稅ヲ以テ之ヲ

補完スルコトガ最モ適當デアッテ、且ツ實行のナリト認メタノデアリマス、尙ホ茲ニ直接國稅ノ體系ニ關連シテ一言イタシタイト思ヒマスノハ、家屋稅ノコトデアリマス、土地、營業及資本利子ニ補完稅ヲ課シマスル以上ハ、同ジク資產所得タル所ノ家屋ノ收益ニ對シテモ、亦理論上國稅トシテ相當ノ負擔ヲナサシムルヲ適當トスベキデアリマスルケレドモ、特ニ徵稅上ノ便否ト地方財源關係トヲ考慮イタシマシテ、今之ヲ國稅トスルハ策ノ得タルモノニ非ズト信ジマスルガ故ニ、家屋稅ハ之ヲ地方稅タラシムルコトト致シタノデアリマス、以上申述ベマスルガ如ク、今回ノ稅制整理ハ歲入ニ著シキ増減ナカラシムル範圍内ニ於テ、大體現行直接稅ノ組織ヲ根據トシテ實行セムトスルモノデアリマシテ、其各稅ヲ通シタル具體的ノ稅制改正ニ當リマシテハ、租稅ノ體系ヲ正シ負擔ノ均衡ヲ期スルニ在ルコトハ勿論デアリマスルケレドモ、一面、國民全體ノ福利ヲ増進スルコトニ深甚ノ注意ヲ拂ヒ、殊ニ時代ノ趨向ニ鑑ミマシテ、社會政策的ノ效果ヲ舉グルニ努ムルト同時ニ、事業ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ、産業ノ發展ニ資セムトスルノ方針ヲ採ッタノデアリマス、即チ所得稅及相續稅ノ免稅點ヲ引上ゲ、新ニ地租ニ免稅點ヲ設ケ、又綿織物ノ消費稅ヲ免除シ、通行稅、醬油稅、賣藥稅等ヲ全廢セムトスルハ、負擔ノ公正ヲ圖ルト共ニ、現在並ニ將來ニ於ケル社會的、經濟的ノ狀態ニ深ク思フ致シ、中産階級以下多數國民ノ生活上ノ負擔ヲ輕減シ、以テ社會政策的ノ果ヲ舉ゲムトスルノ趣旨ニ出デタルモノデアリマス、法人ノ留保所得ニ對スル累進課稅ヲ撤廢シテ比例稅ト爲シ、外形標準ニ依ル所ノ現行營業稅ヲ全廢シテ、之ニ代ルニ純益ヲ標準トスル營業收益稅ヲ以テシ、第一種所得稅ト、第二種所得稅トノ重複課稅ヲ避ケ、又營業收益稅ト、地租又ハ資本利子稅トノ重複課稅ヲ避ケ、地租ノ課稅標準ヲ貸賃價格ニ改メ、田畑地租ニ對シテ相當ノ輕減ヲ行ハムトスルハ、主トシテ負擔ノ公平ヲ圖ルト同時ニ、事業ノ基礎ヲ鞏固ニ致シ、産業ノ發展ヲ助成セムトスルガ爲デアリマス、而シテ是等諸稅ノ改廢ニ依ル所ノ財源補填ノ爲ニモ亦前記ノ方針ヲ基礎ト致シマシテ、國民ノ負擔ヲシテ其擔稅能力ニ應ゼシムルト同時ニ、生活必需品ニ對スル課稅ヲ避ケ、主トシテ嗜好品ト認ムベキモノヲ選ビ、前記資本利子稅創設ノ外、相續稅ノ稅率ノ引上、酒精飲料ニ對スル増率、清涼飲料稅ノ新設、及煙草ノ定價引上ニ依ルコトト致シタノデアリマス、稅制整理計畫ノ歲入ニ及ボス所ノ影響ニ付キマシテハ、今之ヲ社會政策的ノ方面ト、其他ノ方面トニ分ケマ

シテ、觀察ヲ致シマスルニ、先ヅ社會政策的效果ヲ舉ゲムガ爲ニ行ヒマスルモノハ、平年度ニ於テ、所得稅ニ於ケル免稅點ノ引上及少額所得者ニ對スル扶養家族ニ關スル控除額ノ改正ニ依ッテ四百七十餘萬圓、地租ニ於ケル免稅點ノ設置ニ依リ千二百餘萬圓、相續稅ニ於ケル免稅點ノ引上ゲニ依リ六十餘萬圓、通行稅ノ廢止ニ依リ千六百六十餘萬圓、醬油稅ノ廢止ニ依リ七百十餘萬圓、賣藥稅ノ廢止ニ依リ千十餘萬圓、綿織物ニ對スル消費稅ノ免稅ニ依リ二千五百三十餘萬圓、合計七千七百七十餘萬圓ヲ減少スベキ見込ミデアリマス、而シテ其他ノ整理ノ爲ノ増減ハ、平年度ニ於テ、所得稅ノ減五百四十餘萬圓、地租ノ減九百六十餘萬圓、營業稅ノ廢止、營業收益稅ノ新設ニ因ル差引ノ減ガ四百十餘萬圓、以上減少額計千九百三十餘萬圓、資本利子稅ノ新設ニ因ル増加千四百八十餘萬圓、相續稅ノ改正ニ因ル増六百八十餘萬圓、酒造稅ノ改正ニ因ル増二千七百九十餘萬圓、麥酒稅ノ改正ニ因ル増五百五十餘萬圓、酒精及酒精含有飲料稅ノ改正ニ因ル増三十餘萬圓、沖繩縣酒類出港稅ノ新設ニ因ル増六萬餘圓、清涼飲料稅ノ新設ニ因ル増四百三十餘萬圓、骨牌稅ノ改正ニ因ル増五十餘萬圓、煙草定價引上ニ因ル増二千二百二十餘萬圓、以上増加額ノ計八千二百七十餘萬圓、増減差引増額六千三百四十餘萬圓デアリマシテ、此増加額ト前ニ申シマシタ所ノ社會政策ノ整理ニ依ル減少額七千七百七十餘萬圓ト、更ニ差引キマスルトキニハ結局、今回ノ稅制整理全體ニ依ッテ平年度、即チ大正二十二年度ニ於テ八百三十餘萬圓ノ減少トナル計算デアリマス、世上或ハ今回ノ稅制整理ヲ以テ直接稅ニ減ズル所ガ多ク、却テ間接稅ノ増徴ニ依ッテ其財源ヲ補填スルモノデハナイカト云フ誤解ヲ致シ、殊ニ酒稅ノ増徴、清涼飲料稅ノ新設及煙草定價引上等ニ對シテ非難ヲ試ミムトスル者ガアルヤウデアリマスガ、以上説明イタシマシタ通り、今回ノ稅制整理ハ社會政策ノ效果ヲ舉グルコトニ特ニ重キヲ置キマシテ、其直接稅タルト間接稅タルトヲ問ハズ、主トシテ中産階級以下多數國民ノ負擔ヲ輕減セムガ爲ニ、實ニ七千七百七十餘萬圓ノ減稅ヲ行ヒタルニ拘ラズ、間接稅ノ増加額ハ、嗜好品タル酒類、清涼飲料及煙草等ニ對スル負擔ニ於キマシテ六千四十餘萬圓ヲ算スルニ過ギナイノデアリマス、即チ稅制整理ノ全體ヲ通ジテ社會政策ノ效果ノ顯著ナルコトハ、疑ヲ容レナイ所ト信ズルノデアリマス、以上ハ稅制整理ノ諸案ニ對スル總括的ノ説明デアリマスガ、是ヨリ所得稅法中改正法律案以下各法律案ノ内容ニ付キマシテ、其要點ヲ説明イタシタイト思ヒマ

ス、先ヅ所得稅ニ付キマシテハ、現行所得稅法ハ大正九年ニ於テ殆ド根本的ニ改正セラレタルモノデアリマシテ、其後未ダ多クノ年月ヲ經過イタシマセヌケレドモ、其實施ノ狀況ト社會上經濟上ノ變遷トニ鑑ミ、相當ノ改正ヲ加フルノ必要ガアルト思フノデアリマス、今回改正ノ主要ナル點ヲ舉ゲテ見マスレバ、第一ニ法人ノ留保所得ニ對スル累進的課稅ヲ廢シ、留保所得ト配當所得トノ區分ヲ爲サズシテ、所得ノ總額ニ對シテ百分ノ五ノ比例稅ヲ課セムトスルモノデアリマス、現行法ニ於キマシテハ法人ノ所得中、配當シタル部分ト留保シタル部分トニ對スル課稅ヲ異ニ致シ、配當所得ニ付テハ百分ノ五ノ比例稅デアリマスニ拘ラズ留保所得ニ對シテハ百分ノ五ヨリ百分ノ二十ニ達スル累進的稅率ヲ適用シマスガ故ニ、自ラ法人ノ社内留保ヲ少カラシムル傾向ヲ生ジマシテ、事業ノ基礎ヲ薄弱ナラシメ、延テ産業ノ發達ヲ阻碍スルト云フ非難ガアルノデアリマス、而シテ現行ノ制度ハ元來配當金ノ綜合課稅ヲ回避セムガ爲ニスル不當ノ留保ヲ防グノ目的ニ出ヅルモノデアリマシテ、一應ノ理由ガナイデモアリマセヌガ、法人ノ種類ヲ問ハズ、又留保ノ要否ヲ論ゼズシテ、總テノ法人ニ對シ一律ノ取扱ヲ致シマスルガ故ニ、實際上、配當金ノ綜合課稅ヲ回避セムトスル意思ヲ有シナイ所ノ一般ノ法人ニ對シテモ、尙ホ高率ノ課稅ヲナスコトナリマシテ、實施ノ狀況ニ照シ、甚ダ適當ナラズト認メマシタノデ、今回ノ改正ニ於テ留保所得ニ對スル累進課稅ヲ撤廢イタシ、留保ト配當トノ區分ヲナサズシテ、其所得ノ總額ニ對シ現行留保所得ノ最低稅率、即チ百分ノ五ノ比例稅ヲ課スルコトト致シタノデアリマス、然レドモ一面同族會社等ニ於テ故意ニ多額ノ留保ヲ致シマシテ、配當金ノ綜合課稅ヲ免レムトスルモノニ付キマシテハ、負擔ノ公平ヲ圖ルノ見地ニ於テ、固ヨリ之ヲ默過スベキ限リデハナイノデアリマス、此點ニ關シテハ、現行法ノ規定ニ適當ナル改正ヲ加ヘマシテ、其活用ヲ圖リ、以テ負擔ノ均衡ヲ保持スル上ニ於テ遺憾ナカラシメムトスル考デアリマス、第二ニハ、第一種所得稅ト第二種所得稅トノ重複課稅ヲ避ケルガ爲ニ、第一種所得稅額中ヨリ其事業ノ年度ニ於テ納付シタル所ノ第二種所得稅ヲ控除スルコトト致シタノデアリマス、現行ノ所得稅法ニ於テ公債、社債、利子及銀行預金ノ利子等ヲ第二種ノ所得トシテ、所謂源泉課稅ノ方法ニ依ッテ課稅イタシテ居リマスノハ、主トシテ實行上ノ便宜ニ基クモノデアリマシテ、單純ナル理論ノミヨリシマスレバ、之ヲ廢止イタシマシテ、第三種所得ニ合併イタシ、他ノ所得ト共ニ

綜合課稅スルヲ相當トスルノデアリマスケレドモ、我國現在ノ實情ニ鑑ミマ  
スレバ、租稅連脱ノ弊ガ少クナイノデアリマス、從テ之ガ爲ニ歲入ノ缺  
陥多大ナルベキコトハ、殆ド疑問ノ餘地ナイ所デアリマシテ、到底之ヲ  
實行スルコトハ出來ナイノデアリマス、併ナガラ法人ノ所得ヲ計算スルニ  
當リマシテ、其所得中ニ第二種所得稅ヲ課セラレタル所得ガアルト云フコ  
トガ明瞭ナル場合ニ於テモ、尙ホ其所得ノ總額ニ對シテ第一種所得稅ノ金額  
ヲ賦課イタシマスルトキハ、明カニ二重課稅ノ結果ヲ生ジマスルガ故ニ、  
此點ニ關シ適當ナル改正ヲ加フルノ必要アルコトヲ認メマシテ、第一種所  
得稅額ヨリ其事業年度ニ於テ納付イタシマシタル第二種所得稅ヲ控除スル  
コトニ致シ、以テ法人所得稅ノ負擔ヲ適當ニ緩和スルコトヲ致シタノデア  
リマス、第三ニハ第三種所得稅ノ免稅點八百圓ヲ千二百圓ニ引上ゲムトス  
ルノデアリマス、現行法ニ於ケル免稅點八百圓デアリマスルガ、現時、我  
國ニ於ケル國民生活ノ程度ヲ標準トシテ觀察ヲ致シテ見マスルニ、一箇月所  
得百圓ニ滿タザルモノニ對シテ一般所得稅ヲ負擔セシムルト云フコトハ、社  
會政策的の見地ヨリ見テ相當ニアラズト認メマスルガ故ニ、所得年額千二百圓  
ヲ以テ第三種所得稅ノ免稅點ト致サムトスルノデアリマス、第四ニ山林所  
得ニ付キマシテハ、此所得額ヲ五分シタル金額ニ對スル稅額ヲ五倍シタルモ  
ノヲ以テ、其ノ稅額トスルコトニ改正セムトスルノデアリマス、現行法ニ於  
キマシテハ、山林所得ナルモノハ數年又ハ數十年間其立竹木ヲ養成シタル結  
果生ズルモノデアルト云フ點ニ鑑ミマシテ、之ヲ他ノ所得ト區分シテ稅率ヲ  
適用シテ居ルノデアリマスルガ、實際上尙ホ林業者ノ苦痛ガ少ナカラザルモ  
ノアリト思ヒマスルガ故ニ、其負擔ヲ緩和スルノ必要ガアルト認メタノデア  
リマス、而シテ其方法ニ付キマシテハ、從來種々ノ議論ガアルノデアリマス  
ルガ、合理的ニシテ而モ實行的ナル方法ヲ發見スルコトハ頗ル困難デアリマ  
シテ、大體ノ達觀上、今回提案イタシマシタル程度ヲ以テ、適當ノ負擔ニ歸  
著セシムルコトガ出來ルト認メタノデアリマス、第五ニハ尙ホ現行法ニ於ケ  
ル扶養家族ノ控除ハ所得三千圓以下五十圓、二千圓以下ハ七十圓、千圓以下  
ハ百圓ト區分シテアリマスケレドモ、此際所得總額三千圓以下ノモノハ、扶  
養家族一人ニ付キ總テ百圓ノ控除ヲ行フコトヲ致シ、又勤勞所得ノ控除等、  
其他ノ點ニ付キマシテモソレゾレ適當ナル改正ヲ加フルコトヲ致シタノデア  
リマス、次ニ地租ニ付キマシテハ課稅標準ヲ土地ノ賃賃價格ニ改メマシテ、之

ニ依ッテ現行ノ法定地價課稅ノ最大缺點タル負擔ノ不公平ヲ除キ、土地ノ負擔  
ヲシテ成ルベク其收益ニ伴ハシメムトスル計畫デアリマス、蓋シ賃賃價格ノ  
調査ト申シマスルコトハ、元ヨリ相當困難ナル事業デアリマスルガ、現行地  
價ノ修正ニ比較イタシテ見マスレバ、其實行ガ比較的容易デアリマシテ、且  
ツ實際ノ事情ニ適合シタル結果ヲ得ラルルモノト考ヘテ居リマス、賃賃價格  
調査方法等ニ關シマシテハ、別途法律案ヲ提出イタシマシテ、御協贊ヲ求  
メル筈デアリマス、而シテ賃賃價格調査完了マデニハ、約二箇年ノ日子ヲ要ス  
ル豫定デアリマスル故ニ、地租條例ノ根本的改正ハ、之ヲ二箇年ノ後ニ待タ  
ナケレバナラヌノデアリマス、然ルニ今回ノ整理ニ依ル所ノ稅法ノ改正ハ、  
大體大正十五年度ヨリ實施スルコトニナッテ居リマスル故ニ、之トノ權衡上、  
地租ニ對シマシテモ、賃賃價格ノ調査完了ニ至ルマデノ期間ニ付キ、相當ノ  
經過的改正ヲ加ヘテ其負擔ヲ輕減スルノ必要ガアルト認メタノデアリマス、  
唯今議題トナッテ居リマスル地租條例中改正法律案ハ即チ此趣旨ニ基クモノ  
デアアルノデアリマス、改正ノ要點ハ第一ニ田畑地租ノ一分減ヲ實行セムトス  
ルノデアリマス、現行法ニ於ケル田畑ノ稅率百分ノ四箇五ヲ百分ノ三箇五ニ  
低減ヲ致シ、北海道ニ於ケル地租ニ付テモ同一ノ割合ヲ以テ百分ノ三箇二ヲ  
百分ノ二箇五ニ低減ヲ致シ、大正十五年及同十六年分ノ地租ニ付キ之ヲ適用  
セムトスルノデアリマス、田畑ニ對スル地租率輕減ノ政府案ノ理由ハ、言フ迄  
モナク耕地ニ對スル負擔ヲ輕減シ、農村ノ振興ニ資セムトスルモノデアリマ  
ス、而シテ賃賃價格ヲ課稅標準トスル場合ニ於ケル地租ノ稅率ハ、之ヲ二箇  
年後地租ノ根本的改正ヲ行フ時ニ於テ、適當ニ決定スル筈デアリマスルガ、  
其稅率ノ定メ方ハ、大體地租ノ總額ヲシテ今回ノ經過的改正ニ因ッテ低減ヲセ  
ラレマシタル結果ノ金額ヲ超過セシメザルヤウニ致シタイト考ヘテ居リマ  
ス、第二ニハ田畑地租ニ免稅點ヲ設ケマシテ、納稅者ガ住所地ノ市町村内ニ  
於テ所有スル所ノ田畑ノ地價二百圓未滿ナル場合ニ於キマシテハ、其地租ヲ  
免除セムトスルノデアリマス、田畑ノ地租ニ免稅點ヲ設ケムトスルノハ、主  
トシテ小地主タル自作農ノ負擔ヲ輕減イタシ、之ガ維持創設ヲ助成セムガ爲  
デアリマス、此點ニ關シマシテ或ハ理論上、同一人ノ全國ニ於ケル所有田畑ヲ  
綜合シテ免稅點ヲ定ムベシトノ說ガアルヤウデアリマスルケレドモ、此說ハ  
現在ニ於ケル地租徵收ノ實務ニ照シテ實行困難デアリマスルノミナラズ、若  
シ強ヒテ之ヲ實行セムトセバ容易ナラザル所ノ經費ト手數トヲ要シ、而カモ

之が實益ニ乏シク事實上、得策デナイト認メマスルガ故ニ、實行論トシテハ市町村ヲ單位トシテ之ヲ決定スルノ外ハナイノデアリマス、而シテ住所都市町村分ニ限リ免稅スルコトト致シマシタノハ、住所以外ニ田畑ヲ所有イタシテ居リマスル者ハ、概シテ小農ニアラズ、且ツ其多クハ小作ニ付スルモノト認メラルルガ故デアリマス、尙ホ貸賃價格ノ調査完了後ニ於キマシテハ、貸賃價格ヲ標準トシテ適當ニ免稅點ヲ決定スル見込デアリマス、次ニ營業稅ノ廢止及營業收益稅ノ創設ニ付テ説明ヲ致シマス、現行營業稅ノ缺點ニ付キマシテハ、多年帝國議會ニ於テ論議サレマシタル所ニ依ッテ明瞭デアリマスルガ如ク、外形標準ニ依ッテ課稅イタシマスルガ故ニ、課稅ノ負擔ガ營業ノ利益ト相伴ヒマセヌ、爲ニ負擔ノ均衡ヲ失ストノ非難ガ高イノデアリマス、此缺點ヲ除カムガ爲ニハ、區々タル部分的ノ改正ヲ以テ致シマシテハ、到底其目的ヲ達スルコトガ出來マセヌ、結局、外形標準課稅ノ主義ヲ排除シ、營業純益ヲ標準トシテ、各納稅者ノ負擔能力ニ應ジ、適當ナル負擔ヲ課スルコトニ改ムルノ外ニハ、他ニ良策ガナイモノト認ムルノデアリマス、而シテ純益ヲ課稅標準トスルコトハ、現行營業稅ノ組織ヲ根本的ニ改正スルモノデアリマスガ故ニ、寧ロ現行營業稅ハ之ヲ廢止シ、新ニ營業收益稅ヲ創設イタシマスル方ガ適當デアルト考ヘタノデアリマス、營業收益稅ノ要點ヲ擧ゲテ見マシレバ、第一ニハ、其課稅ノ範圍ハ、法人ニアリマシテハ原則トシテ營利法人全部ニ課稅シ、個人ニアリマシテハ大體現行營業稅法ノ課稅業體ニ限定スルコトト致シマシタノデアリマス、個人ノ課稅業體ハ大體現行營業稅ノ如クスルニ拘ラズ、法人ニ付テハ其業體ヲ限定セズシテ、原則トシテ總テノ營利法人ニ對シ課稅セムト致シマスルノハ、等シク營利ヲ目的トスル法人ノ間ニ於テ、其事業ノ種目ニ依リ營業收益稅ノ課否ヲ異ニスベキ理由ニ乏シク、是ガ爲ニ負擔ノ不權衡ヲ來スバカリデナク、假リニ其課稅業體ヲ限定スルモノト致シマスレバ、營業收益稅ノ課稅ヲ受ケザル法人ノ利益配當ニ對シマシテハ、理論上此度新設セラルベキ所ノ資本利子稅ヲ課セザルヲ得ナイノデアリマス、即チ法人事業ノ利益ニ對シマシテハ、何レカノ補完稅ノ負擔ヲ免ルルコトヲ得ナイノデアリマスルガ故ニ、法人ニ對スル課稅業體ヲ限定スルト云フコトハ、營業收益稅ヲ課スベキカ、將又資本利子稅ヲ課スベキカト云フ區分タルニ過ギナイノデアリマス、果シテ然ラバ負擔ノ公平ヲ期セムガ爲ニ、寧ロ總テノ法人ニ對シマシテ一律ニ營業收益稅ヲ課スルコトガ相當デアルト

考フルノデアリマス、加之課稅業體ヲ限定イタシマスル時ハ、課稅營業ト非課稅營業トヲ兼營シテ居リマスル所ノ法人ノ純益金額ノ計算ニ付テ、頗ル煩雜ナル手數ヲ要シマスルノミナラズ、其配當金中、非課稅營業ノ分ヲ適當ニ見積リマシテ、之ニ對シテ資本利子稅ヲ徵收スルト申シマスルコトハ、是ハ實行殆ド不可能デアルト申シテ宜シイノデアリマス、以上ノ理由ニ依リマシテ營利法人ニハ原則トシテ全部營業收益稅ヲ課スルコトト致シタ次第デアリマス、第二ニハ稅率ハ法人ニ對シテハ百分ノ三・六、個人ニハ百分ノ一・八ト致シタノデアリマス、法人ト個人トハ其純益計算ノ方法ヲ異ニ致シシテ居リマスルシ、且ツ個人ノ純益中ニハ勤勞ニ依ル所得ヲ包含イタシテ居リマスル部分ガ、大體ニ於テ法人ヨリモ多イノデアリマスルガ故ニ、個人ハ法人ニ比シ幾分其稅率ヲ低下スベキ理由ガアリマスルノミナラズ、法人ト個人トノ現在稅額ノ權衡上カラ考ヘマシテモ、稅率ニ於テ若干ノ區分ヲ設クルト云フコトガ相當デアルト思フノデアリマス、而シテ法人個人ノ全體ヲ通ジマシテ、現行營業稅法ニ依ル稅額ニ對シ、其負擔ヲ相當低減セシムル見込ヲ以テ、此稅率ヲ決定イタシタノデアリマス、第三ニハ、個人ノ營業ニ付キマシテハ純益四百圓ヲ以テ免稅點ト致シタノデアリマス、營業收益稅ニ免稅點ヲ設ケマスルノハ、現行營業稅ニ於ケルト同一ノ趣旨ニ出デタルモノデアリマス、唯現行營業稅ノ免稅點ハ、外形標準ニ依ッテ決メラレテ居リマスルノニ反シ、本稅ノ免稅點ハ純益ニ依ルノデアリマスルガ故ニ、其程度ハ必シモ一致セナイノデアリマスルガ、田畑地租ニ於ケル免稅點トノ關係等ヲモ考慮イタシ、且ツ現行營業課稅ニ比シマシテ幾分カ其程度ヲ高ムルノ目的ヲ以テ、之ヲ純益四百圓ト定メタノデアリマス、第四ニハ營業收益稅ト地租及資本利子稅トノ重複課稅ヲ避クルガ爲ニ、營業收益稅額中カラ地租及資本利子稅額ヲ控除スルコトト致シタノデアリマス、營業收益稅ノ課稅標準タル純益中ニ、土地ノ收益又ハ資本利子ヲ包含スル場合ニ於キマシテ、之ニ對シテ何等斟酌ヲ加フルコトナク營業收益稅ヲ賦課イタシマスルトキハ、同一ノ收益ニ對シニ様ノ補完稅ヲ課スルコトトナリマスノデ、恰モ第一種所得稅ト第二種所得稅トノ重複課稅ヲ避ケタルガ如ク、營業收益稅額中ヨリ地租及資本利子稅額ヲ控除スルノガ相當デアラウト認メタノデアリマス、但シ個人ノ資本利子稅ハ營業純益ノ計算上、之ヲ除外イタシマスルガ故ニ、個人營業者ニ付テハ、其營業ニ專用スル土地ノ地租ノミヲ、營業收益稅額カラ控除スルコトト致シタノデ

アリマス、其他純益金額ノ調査決定並ニ申告徵收方法等ニ關スル規定ハ、大體所得稅ニ準ジテ居ルノデアリマス、個人營業ノ純益金額ヲ調査スベキ調査委員會モ亦、本稅ノ爲ニ之ヲ特設スルコトヲ致シマセズ、所得調査委員會ニ於テ所得金額ノ調査ト同時ニ之ヲ調査スルコトヲ致シ、以テ手數ヲ省略スルト共ニ、兩稅ノ聯絡ニ付テ遺憾ナカラシメムコトヲ期シタノデアリマス、而シテ本稅ハ大正十五年分カラ之ヲ實施スルコトガ困難デアリマスルカラ、其施行期ヲ大正十六年分ヨリトシ、大正十五年分ノ營業稅ニ付キマシテハ、尙ホ現行ノ營業稅法ニ依ルコトト致シマシテ、其稅額ノ百分ノ八ヲ免除セムトスルノデアリマス、此免稅額ハ、現行營業稅額ニ對シ之ニ代ハルベキ營業收益稅額ノ減少スベキ金額ヲ凡ソノ標準トシテ決メタモノデアリマス、次ニ資本利子稅ノ新設ニ付テ説明ヲ申上ゲヤウト思ヒマス、今回ノ稅制整理ニ當リマシテハ、我國現下ノ經濟事情ニ照シ、成ルベク新稅ノ設定ヲ避クルノ方針ヲ執ツタノデアリマスルガ、租稅ノ體系ヲ整ヘテ負擔ノ均衡ヲ圖リ、併セテ一部ノ財源補填ノ方法ト致シマシテ全體ノ整理計畫上、資本利子稅ヲ新設スルコトト致シタノデアリマス、蓋シ資産所得ニ對シ一般所得ノ外ニ別ニ補完稅ヲ課スベキノ理由ニ付キマシテハ茲ニ説明ヲ要シナイ所デアリマシテ、土地及營業ニ對スル補完稅トノ權衡上、公債社債其ノ他ノ資本利子ニ對シテモ、又一ツノ補完稅ヲ課スルコトト致シ、以テ現行直接國稅ニ於ケル體系ノ不備ヲ矯正シマスルト同時ニ、之ニ依ツテ一面他ノ直接國稅ノ整理ニ依ル所ノ減收ヲ補填スル財源ノ一部ニ供セムトスルニ在ルノデアリマス、而シテ資本利子稅ノ要點ト致シマスル所ハ、第一ニ課稅物件ヲ、甲乙ノ二種ニ區分ヲ致シ、公債、社債、銀行預金ノ利子等ノ所得稅法ノ第二種所得ニ屬スルモノヲ甲種ノ資本利子トシ、第三種所得納稅義務者ノ取得スル所ノ營業ニアラザル貸金預金ノ利子ヲ、乙種ノ資本利子稅ト致シテアルノデアリマス、甲種ノ資本利子稅中ニハ、國債ノ利子ヲモ包含セシメテ居ルノデアリマス、近來國債利子ニ對スル所得稅免除ニ付キマシテ、屢、有力ナル反對ノ聲ヲ耳ニ致スノデアリマス、併ナガラ財政經濟上ノ現狀ニ照シ、今俄ニ從來ノ傳統の特典ヲ奪ヒマシテ、之ニ向ツテ所得稅ヲ課スルコトハ、國策トシテ、果シテ利益デアアルヤ否ヤト云フコトハ、慎重ナル調査ヲ要スル所デアルト思ヒマスルガ、今回、新設スベキ所ノ資本利子稅ニ於テ亦復國債ヲ除外イタシマスル時ハ、他ノ證券ニ對シテ益、負擔ノ權衡ヲ失スルコトナリマスルガ故ニ、國債利子

ニ對シテハ、依然トシテ所得稅ヲ課セザルノ方針ヲ繼續スルコトト致シ、唯新ニ設置スベキ補完稅タル資本利子稅ノミヲ課スルコトト致シタノデアリマス、第二ニハ稅率ハ、資本利子稅ノ金額ノ百分ノ二ト致シテアルノデアリマス、地租及營業收益稅トノ權衡ヨリ稽ヘマスレバ、本稅ノ稅率百分ノ二ト云フコトハ、稍、低キニ失スルノ感ガナイデモアリマセヌケレドモ、現下經濟界ノ情況ニ鑑ミ且ツ本稅ガ新稅デアルト云フ點ヲ斟酌イタシマシテ、此程度ニ止ムルヲ穩當ト認メタノデアリマス、第三ニハ課稅ノ方法ハ、所得稅ニ準ズルコトト致シ、即チ甲種ノ資本利子ハ、第二種所得ト同ジク、利子支拂ノ際ニ徵收シ、乙種ノ資本利子ニ付テハ、第三種所得ト同時ニ所得調査委員會ニ於テ調査決定セムトスルノデアリマス、次ニハ相續稅ニ移リマスルガ、相續稅改正ノ要點ハ、第一ニ免稅點ヲ引上ゲテ、家督相續二千圓ヲ五千圓トシ、遺產相續五百圓ヲ千圓トスルコト、第二ニハ相當程度以上ノ相續財產ニ對スル稅率ヲ引キ上ゲマシテ、他ノ直接國稅ノ整理ニ依ツテ生ズル所ノ歲入減少ノ一部ヲ補填スルコトノ二點デアリマス、増稅ハ成ルベク之ヲ避ケナケレバナラナイコトハ勿論デアリマスルノミナラズ、殊ニ相續稅ニ於テハ我國古來ノ美風タル家族制度トノ關係ヲ考慮イタシマシテ、其稅率ノ引上ゲト云フコトハ、政府ノ好ム所デハナカッタノデアリマス、併ナガラ他ノ直接國稅ニ於テ是非トモ實行セナケレバナラヌ所ノ整理ノ爲ニ生ジタル歲入ノ減少ヲ補填スベキ財源ト云フモノハ、前ニ説明イタシマシタ所ノ資本利子稅ノ外ニハ、ドウ致シマシテモ之ヲ相續稅ノ増徵ニ求メナケレバ、他ニ之ヲ發見スルコトハ出來ナイノデアリマス、且ツ本稅ハ施行以來二回ニ互ツテ減稅ヲ行ヒマシタ結果、現行ノ稅率ハ創設當時ノ稅率ニ較ベマシテ著シク低下セラレテ居リマスルガ故ニ、一面ニ於テ免稅點ヲ引上ゲマシテ小財產ノ相續ニ對スル負擔ヲ免除シマスルト同時ニ、相當程度以上ノ財產ヲ相續イタシマシタ場合ノ稅率ヲ幾分引上ゲマスルト云フコトハ、全體ノ整理計畫上カラシテモ、將又今日ノ社會狀態ニ照シマシテモ、寔ニ已ムヲ得ナイ所デアルト信ズルノデアリマス、尤モ稅率ノ引上ハ納稅者ノ苦痛ヲ增加スベキコト勿論デアリマスルガ故ニ、之ヲ緩和スル趣旨ヲ以テ、税金延納ノ期間ヲ相當延長スルコトニ致シタノデアリマス、次ニ綿織物ニ對スル消費稅ノ免除、通行稅、醬油稅及賣藥稅ノ廢止ニ付キマシテ、簡單ニ説明ヲ致サウト思ヒマス、綿織物ハ多數國民ノ生活必需品デアリマスルガ故ニ、之ニ對スル消費稅ヲ免除シ、消費者ノ負擔ヲ輕減シ

タイト考へマス、尤モ綿織物必シモ悉ク廉價品デハナイト同時ニ、一面綿織以外ノ織物ノ中ニモ廉價品ガアリマスル所カラ、織物ノ一定價格ヲ標準トシテ、其一定價格以下ノ廉價品ニ對シテノミ消費稅ヲ免除スベキデアルト云フ說モ無イデハアリマセヌガ、織物ノ價格ハ御承知ノ通り、經濟界ノ狀況ニ應ジマシテ常ニ變動ヲ致シマスルガ故ニ、價格ヲ標準トシテ織物稅ヲ課スベキヤ否ヤト云フコトヲ決定イタシマスルコトハ、課稅技術上到底不可能ノ事デアリマス、而シテ我國今日ノ國民生活ノ實況ニ於キマシテハ、綿織物ハ國民一般ニ使用セラレ、殊ニ中産階級以下多數國民ニ取テ日常缺クベカラザル重要ナル生活ノ必需品デアリマスルガ故ニ、大體ニ於テ之ヲ他ノ織物ト區別シ、綿織物ニ對シテ免稅スルト云フコトハ、社會政策上最モ當ヲ得タルモノデアルト信ズルノデアリマス、通行稅ハ施行以來、長年月ヲ經過イタシ、國民ノ久シク慣熟シタル租稅デアリマシテ、納稅者ガ苦痛ヲ感ズルコト少ク、且ツ徵收費ヲ要スルコトモ比較的ニ少キガ故ニ、之ヲ存置スル方ガ宜シイト云フ論モアルヤウデアリマスルガ、斯ノ如キハ畢竟姑息ノ議論デアリマシテ、社會政策上甚ダ不適當ナル租稅デアルト信ズルノデアリマス、其歲入ノ實際ヨリ見マシテモ、稅額ノ大部分ト云フモノハ、電車又ハ汽車ノ三等乘客ノ負擔スルモノデアリマシテ、若シ是等中産階級以下ノ負擔スル部分ヲ免除スルモノト致シマスレバ、財政上全ク本稅ヲ存置スベキ理由ヲ失フノデアリマス、要スルニ通行稅ハ理論上ノ根據ニ乏シク、又實際上、中産階級以下多數國民ノ負擔スルモノデアリマスルガ故ニ、單ニ其徵收ガ容易デアルト云フガ如キ薄弱ナル理由ヲ以テ之ヲ存置スルト云フコトハ、租稅ノ制度トシテ甚ダ公正ヲ缺クモノト言ハナケレバナラヌト信ズルノデアリマス、併ナガラ通行稅ノ廢止ヲ機會ト致シマシテ、地方ノ公共團體又ハ民間ニ於テ、直ニ其貨銀ヲ増加スルガ如キコトガアリマシテハ、殆ド本稅ノ廢止ヲ無意義ナラシムルモノデアリマスルガ故ニ、此點ニ付テハ政府ニ於キマシテモ適當ノ方策ヲ講ジマシテ、斯ノ如キ弊害ナカラシムルコトヲ期スル考デアリマス、次ニ醬油ハ國民生活上ノ必需品デアリマスルガ故ニ、之ニ對スル課稅ハ廢止スルヲ相當ナリト認メマシテ、醬油造石稅及ビ自家用醬油稅トモ之ヲ全廢スルコトニ致シタノデアリマス、又賣藥ハ主トシテ僻地ノ住民、又ハ貧困ニシテ醫師ノ診療ヲ受クルコトノ出來ナイ者ニ多ク需要サレルモノデアリマシテ、社會政策的ノ見地ヨリ、賣藥稅ハ之ヲ全廢セムトスルノデアリマス、而シテ賣藥稅廢止ノ際ニ於テ未ダ消

費サレナイ所ノ賣藥ニ貼附イタシテアル印紙ニ對シテ其相當額ノ拂戻ヲナスベシトノ要求ガアルヤウデアリマスケレドモ、若シ之ヲ拂戻スモノト致シマシタナラバ、之ニ因ル國庫ノ負擔ハ容易デナイト思フノデアリマス、加之一旦課稅セラレタル醬油、綿織物等ニシテ、未ダ、消費セラレザルモノニ對シマシテモ、亦同様ニ拂戻ヲナスノ必要ヲ生ズルコトナラウト思ヒマスルガ、而モ是等ノ物件ハ其既ニ課稅セラレタルヤ否ヤノ區分ガ甚ダ不明瞭デアリマシテ、到底拂戻ヲ實行スルコトハ不能デアリマスルガ故ニ、賣藥稅ニ付テモ亦拂戻ヲ致サナイコトトシタ次第デアリマス、唯失效賣藥ニシテ廢棄セムトスルモノニ付キマシテハ、現行賣藥稅法ニ於テ既貼印紙稅額ノ八割又ハ八割五分ヲ新シイ所ノ印紙ニ交換スベキ規定ガアルノデアリマス、然ルニ此際、賣藥稅ノ廢止ト共ニ此制度ヲモ全然撤廢スルコトト致シマストキハ、營業者中非常ニ苦痛ヲ感ズルモノガアルベキコトヲ慮リマシテ、失效賣藥ニ對シテハ、賣藥稅廢止ノ後二箇年ヲ限り既貼印紙稅額ノ五割ニ相當スル金額ヲ交付スルコトト致シタノデアリマス、次ニ酒造稅、酒精及酒精含有飲料稅並ニ麥酒稅ノ改正ニ付テ說明ヲ致シマス、以上申述ベマシタル諸稅ノ社會政策的整理ニ因テ生ズベキ歲入缺陷ノ一部ヲ補填セムガため、嗜好的飲料ニシテ、比較的稅率増徴ノ餘地アリト認メラル所ノ酒類ノ稅率ヲ改正スルコトト致シ、先ヅ酒造稅ニ於テハ清酒一石三十三圓ヲ四十圓ニ引上ゲ、其他之ニ準ジマシテ二割程度ノ増率ヲ實行セムトスルノデアリマス、但シ沖繩縣ニ於キマシテハ、同縣ノ財界著シク不況デアリマシテ、縣民ガ窮狀ニアル所ノ特殊ノ事情ニ鑑ミマシテ、當分ノ内從前通りノ稅率ニ止メ、縣外ニ移出スル所ノ酒類ニ對シテノミ出港稅トシテ今回ノ稅率ニ相當スル課稅ヲ行フコトト致シマシタノデアリマス、尙ホ今回ノ酒造稅法ノ改正ヲ機トシテ、酒造組合ニ對シ、徵稅上必要ナル設備又ハ補助ヲ爲サシムルコトヲ條件トシテ、之ニ一定ノ交付金ヲ交付スルノ制度ヲ設ケムトスルノデアリマス、此交付金ノ額ハ命令ヲ以テ定ムル考デアリマシテ、當該酒造組合ノ製造ニ係ル酒類一石ニ付十錢ヲ交付スル見込デアリマス、此制度ハ現ニ織物消費稅ニ付テ之ヲ實行シテ居ルノデアリマシテ、徵稅上、官民共ニ頗ル便宜ヲ得テ居リマスノミナラズ、一面、酒造組合ノ健全ナル發達ヲ助長シ、釀造業ノ進歩改善ヲ圖ル上ニ於テ相當效果アルコトヲ信ズルノデアリマス、酒造稅ノ増率ト同時ニ、酒精及酒精含有飲料稅ニ付キマシテモ亦二割程度ノ増率ヲ行フコトニ致シタノデアリマ

ス、而シテ從來工業用ノ酒精ニ對シテ戻稅ヲ爲スベキ品種ノ範圍ガ稍狹キニ過ギテ居リマシテ、爲ニ工業ノ發達ヲ助長スル上ニ於テ多少遺憾ガアルト考ヘマスノデ、之ヲ擴張スベキ計畫デアリマシテ、目下調査研究中デアリマタルガ、成ルベク速ニ適當ナル方法ヲ講ズル見込デアリマス、麥酒モ亦嗜好的飲料デアリマシテ、清酒其他ニ比較シマシテ、一層増徴ノ餘地ガアルト認メマスルガ故ニ、約四割増率ヲ行ヒ、其稅率一石ニ付十八圓ヲ二十五圓ニ改メムトスルノデアリマス、次ニ骨牌稅ニ付キマシテハ、明治三十五年本稅ノ施行セラレマシテ此方、未ダ一回ノ増稅ヲモ行ッタコトハナイノデアリマス、爾來一般物價騰貴ノ關係ヨリ之ヲ見マシテモ、相當稅率引上理由ガアリマスノミナラズ、骨牌ノ使用ハ奢侈的消費ニ屬スルモノデアリマスカラ、今回ノ稅制整理ニ當リ歲入補填ノ一財源ト致シマシテ、是ガ増徴ヲ計畫シ、現行一組二十錢ノ稅率ヲ麻雀ニ付テハ一組三圓、其他ノ骨牌ニ付テハ一組五十錢ニ改メルコトト致シタノデアリマス、而シテ骨牌製造者ニ課スル所ノ免許料ハ、現今他ノ消費稅ニ於テ其ノ類例モアリマセヌ、其收人モ極メテ小額デアリマスル故ニ、寧ロ之ヲ廢止スルコトガ適當デアルト認メタノデアリマス、終リニ清涼飲料稅ノ新設ニ付テ説明ヲ致シタイト思ヒマス、今回ノ稅制整理ニ當リマシテハ、既ニ申述ベマシタル如ク、成ルベク新稅ノ設定ヲ避クル方針ヲ採ッタノデアリマスルガ、前記酒類ニ對スル稅率増徴トノ權衡上、就中麥酒トノ權衡ヲ保チ、其稅源ヲ擁護スルト同時ニ、兼テ整理ニ依ル所ノ不足財源ノ一部ヲ補填セムガ爲ニ、清涼飲料稅ヲ新設スルコトト致シタノデアリマス、清涼飲料ノ範圍ヲ如何ニ定ムベキヤト云フコトニ付キマシテハ、調査考究ヲ重ネマシタル結果、麥酒トノ關係並ニ課稅技術上ノ關係等ヲ考慮イタシマシテ、之ヲ炭酸瓦斯ヲ含有スル飲料ニ限ッタノデアリマス、而シテ玉「ラムネ」燻詰ノモノハ一石ニ付七圓、其他ノ燻詰ノモノハ一石ニ付十圓、燻詰以外ノモノハ總テ炭酸瓦斯ノ使用量ニ應ジテ課稅スルノガ便利デアルト認メマシテ、一石ニ付三圓ノ稅率ヲ課スルコトト致シタノデアリマス、玉ラムネ燻詰ニ付キテ低率ナル課稅ヲナシ、燻詰以外ノモノニ稍、高率ナル課稅ヲ致シマスルノハ、主トシテ其消費者ノ負擔力ヲ考慮シタル結果デアリマス、尙ホ自家用ノ清涼飲料ハ之ヲ課稅外ニ置クコトト致シタノデアリマス、尙ホ所得稅ノ改正ニ伴ヒマシテ、大正九年法律第十二號中ニ改正ヲ加ヘ、地租ノ改正ニ伴ヒマシテ、明治三十七年法律第十二號中ニ改正ヲ加ヘ、又醬油稅、賣藥

稅ノ廢止、及ビ清涼飲料稅ノ新設ニ伴ヒマシテ、大正九年法律第五十一號中ニソレゾレ適當ナル改正ヲ加フルコトト致シタノデアリマス、最後ニ法律案トハ關係ガアリマセヌケレドモ、同ジク稅制整理ノ一部トシテ實行イタシマシタル煙草ノ定價値上ニ付テ、此際一言ヲ加フルノ必要ガアルト思フノデアリマス、既ニ述ベマシタルガ如ク、今回ノ稅制整理ハ、社會政策的効果ヲ舉ゲルコトニ重キヲ置キ、直接稅及間接稅ヲ通ジテ、成ルベク中産階級以下多數國民ノ生活上ノ負擔ヲ輕減セムガ爲ニ諸稅ノ廢廢ヲ行ハムトスルモノデアリマシテ、之ニ依ル所ノ歲入ノ缺陷ヲ補填セムガ爲ニ嗜好品デアリマスル所ノ酒類ニ對スル増徴ヲ行ヒマルルト同時ニ、同ジク嗜好品デアリマスル所ノ定價ニ付キマシテモ亦相當ノ引上ヲナスコトニ決シマシテ、昨年十一月七日ヨリ之ヲ施行イタシタノデアリマス、他ノ稅制整理ノ諸法律ノ實施ヲ待タズシテ、之ヲ施行イタシマシタノハ、一旦其計畫ヲ發表イタシマシテ、是ガ實行ヲ猶豫スルガ如キコトガアリマシテハ、各種ノ弊害續出スベキコト明瞭デアリマスルニ依ッテ、之ヲ防止スルノ必要上、先例ニ倣ヒ、計畫ノ發表ト同時ニ之ヲ實施イタシタノデアリマス、右ノ改正ハ製造煙草及輸入煙草ノ各品種ヲ通ジマシテ、大體定價ノ約二割ト云フモノヲ標準トシテ引上ヲ行ッタモノデアリマスルガ、所謂價值ノ關係上、多少此割合ヲ上下スルモノモアリマス外、尙ホ社會政策上ノ要求ヲ加味イタシマシテ、下級品ニ對シテハ成ルベク値上ノ率ヲ低下スルコトニ努メタノデアリマス、以上ハ政府ノ提出ニ係ル國稅ノ整理ニ關スル諸法律案ノ概要ヲ説明デアリマス、然ルニ衆議院ニ於キマシテハ、右ノ中、地租條令中改正法律案ニ修正ヲ加ヘタノデアリマス、衆議院修正ノ第一點ハ、市町村義務教育費國庫負擔額ノ増加ニ伴フ財源ノ一部ニ充當スルガ爲ニ、政府案ニ於ケル地租一分減ノ規定ヲ削除シタルコトデアリマス、修正ノ第二點ハ地租ノ免稅點ニ關スル事項デアリマシテ、政府案ニ於キマシテハ、納稅義務者ノ住所市町村内ニ於ケル田畑地價ノ合計金額二百圓未滿デアリマスルトキハ、其田畑ノ地租ヲ徵收セザルコトニ致シテ居ッタノデアリマスルガ、衆議院ニ於キマシテハ、住所市町村及隣接市町村内ニ於ケル田畑地價ノ合計金額二百圓未滿ナルトキハ其田畑ノ地租ヲ徵收セズ、但シ小作ニ付シタル田畑ニ付テハ此限リニ在ラズト云フコトニ修正ヲ致シ、此修正ハ二ツナガラ衆議院ヲ通過シタノデアリマス、政府ハ右ノ修正ヲ以テ差支ナキモノト認メテ居リマス、地租條令中改正法律案以外、政府提出ノ國

税整理ニ關スル各案ハ何等ノ修正ヲ加ヘラレズ、全部原案ノ儘、衆議院ヲ通過イタシタノデアリマス、尙ホ詳細ナル點ニ付キマシテハ、更ニ適當ノ機會ニ於キマシテ説明申上グルコトガアラウト考ヘマス、要スルニ税制ノ整理ハ國民負擔ノ狀況ニ照シ、又社會上經濟上ニ於ケル趨勢ニ稽ヘ、國家ノタメ最モ緊切重要ナル問題デアルト思フノデアリマス、願ハクバ各法案ニ付慎重ニ御審議ヲ盡サレ、速ニ其成立ヲ見ルニ至ラムコトヲ切望シテ已マザル次第デアリマス

〔國務大臣若槻禮次郎君演壇ニ登ル〕

○國務大臣(若槻禮次郎君) 國運ノ興隆、地方自治ノ伸暢ニ伴ヒマシテ、今ヤ地方財政ハ歲出十三億有餘万圓ノ巨額ニ上ボツテ居リマス、從テ其負擔モ亦決シテ輕クナイノデアリマス、政府ガ曩ニ税制整理ヲ企テマスルヤ、國税ノ整理ト同時ニ、之ニ對應シテ地方税制ヲ刷新スルノ必要ヲ認メマシテ、銳意調査ヲ遂ゲマシタル結果、成案ヲ得マシタ故ニ、茲ニ其基本法デアリマスル所ノ二ツノ法案ノ制定及改正ニ關スル提案ヲ致シタ次第デアリマス、今兩法案ニ付テ逐條的説明ヲ加ヘマスヨリハ、寧ロ其制度及改正ノ基本デアリマス所ノ地方税制整理ノ大綱ヲ述ベマスコトガ、法案ノ御了解ヲ得ルガ爲ニ最モ便宜デアルト信ジマスル故ニ、茲ニ其大綱ヲ説明スルコトニ致シタイト思ヒマス、第一、府縣稅トシテ家屋稅ヲ創設シ、市町村ハ之ニ附加稅ヲ賦課スルコトガ出來ルヤウニ致シタコトガ一ツデアリマス、何故ニ家屋稅ヲ地方稅トシテ創設シタカト申シマスト云フト、其理由ハ大體次ノ如クデアリマス、一ツハ國稅ノ直接稅體系ヲ整備スルニ當リマシテ、所得稅ヲ中軸トシテ、從來是ガ兩翼デアッタ補完稅トシテ存在シテ居リマス所ノ地租及營業稅ニ改正ヲ加ヘテ之ヲ存置スルコトノ外、同ジク所得稅ノ補完ヲ目的トシタル資本利子稅ヲ創設イタシマシタガ、此三稅ト併立シテ收益稅制ノ一部ヲ組成スベキ家屋稅ハ既ニ地方ノ一部ニ於テ好個ノ財源トナツテ居リマスル實況ニ鑑ミマシテ、之ヲ地方稅ニ委ネテ置イテ、國稅トシテ之ヲ創設セナカッタガ故ニ、此國稅整理ニ對應イタシテ、直接國稅ノ體系ヲ補完スルガ爲ニモ、家屋稅ヲ一般ニ施行スルノ必要ヲ認メタノデアリマス、家屋稅ヲ認メタ第二ノ理由ハ、戶數割ハ後ニ述ベマスル如ク、府縣稅トシテハ極メテ不適當ナル稅種ト認メマシタカラ、之ヲ廢止スルコトニ致シマシタ結果、其收入ニ缺陷ヲ生ジマスル故ニ、之ヲ補填スベキ適當ノ財源トシテ之ヲ家屋稅ニ求メタノデアリマス、

家屋稅ヲ創設シタル第三ノ理由ハ、家屋ハ土地、營業ト同ジク、地方團體ノ施設經營ニ依ッテ利益ヲ享受スルモノデアリマスニ拘ラズ、現行地方稅ニ於テハ土地、營業ニ對シテ相當ノ課稅ヲナシテ居リマスケレドモ、家屋ニ對シテハ一般ニ課稅スルノ制度ガ無イノデアリマス、即チ應益原則ニ照シテ、地方ニ家屋稅ヲ創設スルコトガ、蓋シ正當ナル處置ト認メタノデアリマス、大體以上ノ如キ理由ニ依リマシテ、家屋稅ヲ創設スルコトニ致シテ、而シテ其課稅標準ハ收益稅タル本質ニ鑑ミマシテ、評定賃賃價格ヲ以テ課稅ノ標準ト致シ、府縣ニ家屋稅調査委員ヲ組織セシメテ、其調査ニ依ッテ、府縣知事ヲシテ決定セシメルコトニナシタノデアリマス、唯施行ノ當初、其實施ノ圓滑ヲ期スルガ爲ニ、暫定的ニ一時、市町村ニ對シテ、家屋稅ヲ配賦スルコトヲ許シテ置イタノデアリマス、而シテ大正十八年度マデニ家屋賃賃價格ノ準備調査ヲ完了シテ、配賦稅ノ制度ハ廢止スル考デアリマス、家屋稅徵收見込額ハ約三千万圓デアリマシテ、尙ホ市町村ニハ一般ニ之ガ附加稅ヲ課スルコトヲ認メタノデアリマス、府縣稅ノ改正中、第一ハ家屋稅ノ創設デアリマスガ、第二ハ戶數割ハ府縣稅トシテハ之ヲ廢止イタシマシテ、市町村稅トシテ創設スルコトニ致シタト云フトコトデアリマス、何故ニ斯ノ如キ改正ヲ必要トシタカト申シマスルト云フト、現行戶數割ハ納稅義務者ノ資力ヲ標準トシテ賦課シテ居ルノデアリマスケレドモ、府縣ノ如キ廣大ナル區域ノ團體ニ於キマシテハ、能ク各人ノ資力ヲ個個ニ付テ調査シテ公正ナル課稅ヲナスコトガ到底不可能デアリマスルガ故ニ、一ト先ヅ之ヲ市町村ニ配賦スルコトニナツテ居ルノデアリマス、然ルニ之ガ爲ニ同一府縣ノ構成分子デアリマス所ノ各個人ハ、假令同一ノ資力ヲ持ッテ居ル場合デアリマシテモ、其居住スル市町村ヲ異ニシテ居ル場合ニ於キマシテハ、其負擔額ガ違フヤウナ關係ニナルノデアリマス、斯ノ如キハ適當ナル課稅ト申スコトガ出來ナイ譯デアリマスカラ、此際之ヲ廢止スルノガ最モ適當デアルト認メタノデアリマス、然ルニ他面市町村ノ如キ小團體ニ於キマシテハ、能ク各人ノ資力ヲ調査シテ公正ナル負擔ヲナサシムルコトガ出來ルノデアリマス、且ツ配賦ニ基ク負擔ノ不公平ヲ惹起スルヤウナ虞レガナイノデアリマスカラ、之ヲ市町村稅トシテ存セシメルコトニシタ次第デアリマス、而シテ其課稅ノ標準ハ納稅義務者ノ資力ト致スコトハ從來ト變ルコトハナイノデアリマス、唯資力算定ノ標準中ニ是マデハ住家坪數ト云フモノガ入ッテ居リマスケレドモ、住家坪數ナルモノハ家屋

稅トノ關係上之ヲ除イタ方ガ適當デアルト思ヒマシテ、今回ハ之ヲ除クコトニ致シタノデアリマス、又現ニ家屋稅施行地デアリマス所ノ市町村ノ戶數割ヲ市町村稅ニ致シマシテモ、之ヲ施行スルノガ困難デアルト云フ事情ガ從來ト變ルコトガナイノデアリマスカラ、戶數割ニ代ヘテ家屋稅附加稅ヲ課スルコトヲ得セシメルコトモ亦已ムヲ得ナイコトト認メタ次第デアリマス、地方稅整理ノ第三ハ府縣稅タル營業稅雜稅ノ整理ヲ行ツタコトデアリマス、現行府縣稅タル營業稅雜稅中ニ往々細民ニ對シテ賦課シテアルモノガ少ナクナイノデアリマス、是ガ整理ヲ行ヒマスコトハ社會政策上極メテ緊要ノ事ニ屬スルノデアリマス、又其課目モ徒ラニ多岐ニ互フテ居リマスガ故ニ、國民負擔ノ關係ヲ明確ナラシムルガ爲ニ、是ガ整理ヲナスコトモ頗ル必要ナルコトト認メマシテ種目ノ制限、賦課ノ制限等ヲ爲スコトニ致シタ次第デアリマス、地方稅整理ノ第四ト致シマシテハ、府縣稅トシテ特別地稅ト云フモノヲ創設シテ、市町村ニ是ガ附加稅ヲ課スルコトヲ認メタコトデアリマス、何故ニ特別地稅ヲ創設シタカト申スト、地租ニ免稅點ヲ設ケマシタ結果、免稅點以下ノ土地ニ對スル從來府縣及市町村ニ於テ取ツテ居リマス 地租附加稅ト云フモノガ當然消滅スル次第デアリマス、左様ナリマス云フト、地方歲入ニ缺陷ヲ生ズルコトニナリマスガ、倍テ他ニ之ヲ補填スベキ好箇ノ財源ガ無イノデアリマス、然ルニ懸ツテ考ヘテ見マス云フト、免稅點以下ノ土地デアリマシテモ、他ノ一般ノ土地ト等シク地方公共團體ノ施設經營ノ利益ヲ享受スル次第デアリマスガ故ニ、所謂應益原則ニ從ヒマシテ、一般土地ノ地租附加稅ニ代ル程度マデハ負擔ヲ爲サシメテモ、寧ロ公正ノ觀念ニ合スルモノト申スコトガ出來ルト思ハルルノデアリマス、此理由ニ依リマシテ特別地稅ヲ創設スルト共ニ、市町村ニ對シテモ亦是ガ附加稅ヲ課スルコトヲ認メタ次第デアリマス、斯クノ如ク特別地稅ハ地租ノ附加稅ニ代ルモノデアリマスガ故ニ、納稅義務者及課稅標準ノ地租ト同様デアアルベキコトハ勿論、其負擔限度ニ於キマシテモ、之ヲ他ノ一般土地ノ地租附加稅ト同様程度以下ニ止メマスノガ、相當デアルト考ヘテ左様ニ致シタ次第デアリマス、地方稅整理ノ第五ハ、地租及營業稅ノ附加稅率ヲ改正シタコトデアリマス、國稅整理ニ伴ヒマシテ地租及營業稅ノ附加稅ニ於テ減收ヲ見ルコトニナルベキ次第デアリマスガ、地方財政ニハ別ニ之ヲ補填スベキ好財源ガアリマセズ、其儘之ヲ放置シテ置キマス時ハ、他ノ地方稅ニ依ツテ之ヲ補充スルノ外ナイ次第デアリマス、且ツ特ニ此際其輕減

ヲ爲サナケレバナラヌ理由モ又存シテ居ラナイ次第デアリマス故ニ、地租及營業ノ納稅者ノ現在ダケニ、現在負擔シテ居ルダケノ附加稅負擔ノ程度ヲ變更セナイ範圍内ニ於テ附加稅率ノ改正ヲ行ツタ次第デアリマス、地方稅整理ノ第六ハ、市町村ノ所得稅附加稅ハ之ヲ府縣ニ委讓イタシマシテ、原則トシテハ市町村ニハ所得稅附加稅ヲ取ラシメナイコトニ致シテ、府縣ノ所得稅附加稅率引上ゲヲ行ツタコトデアリマス、今回府縣ハ戶數割ヲ廢止スルコトニ致シマシタ故ニ、之ヲ廢止スルノ結果ニ付、府縣稅ノ體系ヲ通觀シテ見マス云フト、純然タル人稅ハ所得稅附加稅ノミデアアルノデアリマスガ、其稅率ガ頗ル低キニアリマシテ、之ヲ相當高メマスコトハ、府縣稅ノ體系ヲ整備スル所以デアルト思ハルルノデアリマス、即チ戶數割廢止ノ爲メ生ジマス歲入缺陷ハ、家屋稅ノ創設ト所得稅附加稅ノ引上ゲ、此ニツノ事ニ依ツテ補稅スルコトニデアリマス、然ルニ他面市町村ニ於キマシテハ、戶數割ノ稅額ガ相當多額ニ上ボリマシテ、更ニ所得稅附加稅ヲ徵收イタシマス云フト、人稅ガ餘リニ重クナル嫌ガアリマス、而シテ府縣稅ニ於テハ戶數割廢止ノ結果ニ因ル減收補填ノ爲ニ行フ所得稅附加稅ノ引上ゲアリマスノデ、之ヲ緩和スルガ爲ニ市町村ノ所得稅附加稅ハ、之ヲ府縣ニ委讓スルノヲ相當デアルトシテ、左様イタシタノデアリマス、唯、將來戶數割ヲ賦課スルコトノ困難ナル市町村ガアリマスガ、其市町村ニ於キマシテハ、全然所得稅附加稅ヲ失ハシメマスコトハ、其租稅體系上カラ申シマシテモ、亦財政經理上カラ申シマシテモ、不適當ナルコトデアリマスガ故ニ、之ニハ現在ノ半バ程度ノ附加稅ヲ內務大臣ノ許可ヲ得タナラバ、賦課スルコトヲ許スコトニ致シタノデアリマス、以上大要縷述イタシマシタ如キ事項ニ關シマシテ、規定ヲ致シテアリマス所ノ法律案ガ、即チ唯今議題ニ上ボツテ居ル法律案デアリマスノデアリマスガ、惟フニ稅制ノ整理ハ徒ラニ空理ニ偏スルコトハ出來マセズ、サレバト云ウテ實際ニノミ走ツテ居ルコトモ亦不可デアリマスガ故ニ、兩者ノ調和ヲ圖ルコトニ付テ格段ノ考慮ヲ加ヘタ次第デアリマス、此整理ノ結果トシテ第一ニ家屋稅及其附加稅ヲ創設シ、應益原則ニ從ツテ地方課稅ノ機會ヲ與ヘ、地租及營業稅ノ附加稅ト相俟ツテ地方稅制ニ於ケル物稅ノ體系ヲ整理シタノデアリマス、第二ニ府縣稅中ノ戶數割ヲ廢止シテ、其人稅體系ノ構成ニ改善ヲ施シタノデアリマス、第三ニ市町村稅ノ體系ニ於キマシテ、戶數割ト所得稅附加稅トノ竝立ヲ廢シテ、其人稅組織ノ構造ニ改善ヲ圖リマシテ、且ツ人稅偏重ノ程度ヲ緩和シタノデ

アリマス、之ニ加フルニ義務教育費國庫負擔金ノ増額ニ依リマス所ノ市町村  
財政ノ餘裕ハ、此機會ニ於テ主トシテ戸數割負擔ノ輕減ニ充當セラルルコト  
ニナリマス次第デアリマスカラシテ、市町村稅體系ニ於ケル人稅偏重ノ傾向  
ハ一層之ヲ緩和スルコトガ出來ルノデアリマス、第四ニ營業稅及雜種稅ノ整  
理ニ依リマシテ、所謂貧民稅ナルモノヲ廢止イタシテ、地方稅制ノ非社會的  
色彩ヲ除キ去ルコトニ相成ツタノデアリマス、斯ノ如クニシテ地方稅中整理ス  
ベキモノハ即チ之ヲ整理シ、廢減スベキハ是ガ廢減ヲ斷行シ、各地方稅間、負  
擔ノ均衡ヲ保持セシムルコトヲ主トシテ、茲ニ法律案ヲ提出シタ次第デアリ  
マス、以上ノ如キ政府ノ原案ニ對シマシテ、衆議院ニ於テ修正ノ意見ガアッ  
タノデアリマス、其要點ハ地租一分減ニ伴ヒマス所ノ地租附加稅改正規定ヲ削  
除イタシマシタコトト、竝ニ營業收益稅及所得稅ノ附加稅ニ關スル修正ヲ施  
シタコトデアリマスガ、政府ハ衆議院ノ修正ハ之ニ依ッテ全ク差支ナイモノ  
ト認メテ居ル次第デアリマス、斯ノ如ク國稅ノ整理ニ伴ヒマシテ、當然地方  
稅ノ整理ヲ爲サナケレバナラズ、地方稅ノ整理ヲ致シ、國稅ノ整理ヲ致シ、  
結局地方稅モ國稅モ之ヲ負擔スル者ハ同ジ國民デアアルノデアリマスカラ、國  
稅ノ整理ト地方稅ノ整理ト相俟ッテ、國民負擔ノ均衡ヲ圖ラムトスルノガ、今  
回政府稅制整理ノ目的デアアルノデアリマス故ニ、願ハクバ慎重ニ御審議ノ上  
ニ、政府提出ニシテ衆議院ノ修正ヲ加ヘラレタルモノヲ御可決アラムコトヲ  
切ニ希望イタシマス

○議長(公爵徳川家達君) 此際、諸君ニ御諮リヲ致シタイコトガゴザイマス、  
本日ハ議事ノ都合上、此程度ニ於テ延會イタシタイト考ヘマス、御異議ハゴ  
ザイマセスカ

〔「異議ナシ」ト呼フ者アリ〕

○議長(公爵徳川家達君) 御異議ナイト認メマス、明日午前十時ヨリ開會イ  
タシマス、議事日程ハ後トヨリ御通知ニ及ビマス、本日ハ是ニテ散會イタシ  
マス

午後零時十四分散會

